

---

# カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

天道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カードファイト！！ ヴァンガード 〽次元と未来を繋ぐ永久の絆〽

### 【Nコード】

N5913Y

### 【作者名】

天道

### 【あらすじ】

先導アイチ、戸倉ミサキ、櫛トシキ、葛城カムイは人間界から惑星クレイに飛ばされてしまう。

そして、惑星クレイのユニット達と共に未来を守るための戦いが始まるのだった。

## 設定（前書き）

ヴァンガードのオリジナル小説となります。

珍しくクロスオーバーではありません（笑）

## 設定

このお話はカードファイト！！ ヴァンガードの長編小説になります。

アニメと漫画の要素を加えた設定が各所あるので、この小説のイチ達は平行世界だと思っていただければ良いと思います。

それから、いくつか相違点があります。

- ・ 權を除くイチ達はシャドウパラディンの存在をまだ知らない。
  - ・ アイチは完全にPSYクオリアに目覚めていない（だが、この小説においてはPSYクオリアは全く役に立たないかもしれない）。
  - ・ アイチとミサキはお互いに惹かれ合っている？
- などなど、色々ありますが、それでも良ければ見てください。

## 第1話 それぞれのイメージ（前書き）

第1話はアイチ達の紹介になります。

ユニット達は第2話からの登場です。

## 第1話 それぞれのイメージ

『ヴァンガード』

それは、この世界で一番大流行しているカードゲームである。

そのヴァンガードのゲーム設定は地球とよく似た“惑星クレイ”を舞台としている。

惑星クレイはファンタジーの魔法だけではなく、科学技術が共に発展しており、現実世界（人間界）とは全く異なる文明が構築されている。

また、惑星クレイには神・ドラゴン・悪魔、または妖精といった存在がごく当たり前に生息している。

誰もが憧れる、夢物語で幻想的な世界。

もし、仮に誰かが考えたこの幻想の世界が本当に実在していたら…  
…？

これは、人間界の先導者<sup>ヴァンガード</sup>と惑星クレイの住人<sup>ユニット</sup>との未来を守るための戦いの物語である。

カードファイト!! ヴァンガード  
く次元と未来を繋ぐ永久の絆く

人間界の日本の東京にあるカードショップ『カードキャピタル』。  
そこにてヴァンガードファイトが行われていた。

「『スタンドアップ! ザ・ヴァンガード!!』」

伏せたカードを表にし、プレイヤーの分身である『ヴァンガード』  
が姿を現す。

「僕は“ばーくがる”にライド!」

「俺様は“バトルライザー”にライド!」

短剣を口にくわえた銀色の犬と、赤と白を基調としたロボットがフ  
ィールドに現れる。

ばーくがるにライドしているのは、可愛らしい容姿をした少し引つ込み思案だが心優しき少年“先導アイチ”。

バトルライザーにライドしたのは、アイチを兄と慕う口は悪いが根は優しい少年“葛城カムイ”。

「ふん……」

それを隣の席から観戦するのは、孤高のヴァンガードファイターの異名を持つ圧倒的な実力を持つ“櫛トシキ”。

「ふわぁ……今日は珍しくこの四人だけか……」

そして、欠伸をしながらばーつとレジ席から観ているのは、カードキャピタルの店員で気が非常に強い銀髪の少女“戸倉ミサキ”。

この四人はカードキャピタルにてヴァンガードファイター四強で、代表チームの『Q4（クアドリ・フォリオ）』のメンバーである。

いつもは多くのヴァンガードファイター達で賑わっているカードキャピタルだが、今日は店内にこの四人しかない。

そして、時間が流れ、アイチとカムイのヴァンガードファイトに決着がつく。

「“騎士王 アルフレッド”でヴァンガードにアタック！」

「くっ、防ぎきれない……ノーガードです。参りました……お兄さん」

カムイのダメージが6となり、アイチの勝利となる。

「ありがとうございます、カムイ君」

「いえ、見事なファイトでした、お兄さん！ でも、次は負けませんよ！」

「僕も負けないからね！」

二人は笑い合いながらカードを片付ける。

すると、アイチはおもむろにカードをテーブルに並び初めてじっとカード達のクランを見つめる。

「ん？ どうしたんですか？ お兄さん」

「ちょっとね……惑星クレイはどんな世界なんだろうと思って……」

「惑星クレイ？ どうして急にそんなことを？」

「子供っぽいかもしれないけど、一度でも良いから惑星クレイに行ってみたいなと思って……」

アイチは恥ずかしさで頬を赤く染めながら言うと、レジ席から出たミサキが話に加わる。

「まあ、誰でも一度は考える事よね……アンタはどう思う？」

ミサキは權に視線を移して聞いてみる。

「……下らないな。そんな夢は現実に起こるはずがない」

櫛は現実的に答える。

「で、でも、イメージするのは自由だよ！　もし、櫛くんが惑星クレイに行ったらどうする？」

「俺が……？」

アイチに問われ、櫛は天井を見上げ、数秒間考える。

そして、櫛は一瞬だけ凶悪な笑みを浮かべてその質問に答える。

「そうだな……俺のイメージを超える“かげろう”達の燃えるような激しい戦いを間近で見てみたい。そう、大地を焼き尽くし、敵を殲滅する戦いをな……」

「あ、あはは……」

「アンタらしいね……」

「ってか、怖過ぎるイメージだろ……」

櫛らしい答えにアイチ達は苦笑を浮かべる。

気を取り直して次はカムイが答える。

「俺様はもちろん、“ノヴァグラップラー”達の白熱の格闘バトルをずっと見てみたい！」

「うん、カムイ君らしいね」

「男の子はみんなそうだからね」

カムイの男の子らしい答えにアイチとミサキは微笑みながらホツとし、今度はミサキが答える。

「私は……“オラクルシンクタンク”で占いをやって欲しいかな……それと、みんなとお話がしたいかな？」

「素敵なイメージですね、ミサキさん」

「へえー、ちゃんと女の子らしいところもあるんだな」

「何か言った？」

カムイの失言にミサキは目を鋭くして怖い表情で睨みつける。

「う、ごめんなさい！ 何でもありません！！」

ミサキが恐ろしくて瞬時にアイチの後ろに構えて謝るカムイだった。

そして、最後にアイチが言う。

「僕は……“ロイヤルパラディン”のみんなにお礼が言いたいです」

「「お礼？」」

「……………？」

アイチの答えに頭に疑問符を浮かべるミサキとカムイ、そして櫂。

「はい。僕がこのカードキャピタルで皆さんと出会えて本当に良かったと思っています。そのきっかけを作ってくれたこのロイヤルパラデインのみんなに一度でも良いから『ありがとう』ってお礼を言いたいです」

アイチにとってはヴァンガードは仲間達を繋ぐ大切な絆。

その答えにミサキとカムイは微笑み、櫂は小さく笑った。

「ふふっ……アイチらしいわね。でも、言い答えね」

「流石はお兄さんです！」

「ふん……」

「は、はい！　ありがとうございます！」

アイチの何気ないたった一言から始まったこの話。

しかし、この話が現実に取りかかろうとはアイチ達はまだ知らなかった。

## 第2話 動き出す運命（前書き）

今回はブラスター・ブレードなどのユニット達が登場します。

## 第2話 動き出す運命

その夜。

アイチは自室のベッドですやすやと眠っていると、机の上においてデッキが突然淡い光の輝きを放つ。

更に、デッキのみならずロイヤルパライディンのカードが全て輝いてそのまま宙に浮いた。

カード達は舞うように飛んで寝ているアイチの周りをクルクルと回る。

そして、カード達が光の球体となってアイチの体の中に入っていた。

アイチの体が一瞬光ると、体から巨大な閃光が吐き出され、そのまま窓をすり抜けて空へと飛んで行った。

そして……惑星クレイに信仰と科学技術を融合させた正義と秩序を重んじる聖域国家があった。

国家の名は聖域連合“ユナイテッド・サンクチュアリ”。

そのユナイテッド・サンクチュアリに巨大な神社や神殿が合わさった場所があった。

それは信託魔法や未来予知、占術などの魔法や科学技術を駆使してコンサルティングや経済予測業務を行う巨大企業。

言わずもがな、その企業はオラクルシンクタンクである。

そのオラクルシンクタンクで働く銀髪の可愛らしい一人の少女が息を切らせて急いで走っていた。

「はっ、はっ、はっ……急が、ないと……！」

何かを焦っているようで、少女は大きな扉の前に到着すると、すぐにその大きな扉を開けた。

「失礼します、アマテラス様……！」

部屋に入ると、少女の目的の人物が資料と和菓子を手に持って椅子に座っていた。

「な、何じゃ！？ ロゼンジよ、我はちゃんと仕事をしておるぞ……！」

持っていた和菓子を慌てて隠し、驚いているのは、長い黒髪と身に包んだ豪華な和服が特徴の美女だった。

この美女こそオラクルシンクタンクの代表取締役の“CEO アマテラス”である。

そして、走って部屋に飛び込んで来た少女はオラクルシンクタンク屈指の天才占い師“ロゼンジ・メイガス”。

「アマテラス様……今すぐに、お伝えしたいことが……」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスにあることを伝えるために走って来たのだ。

「取りあえず落ち着くのじゃ。ほれ、我がさつきいれたお茶を飲むのじゃ」

「あ、ありがとうございます……」

ロゼンジ・メイガスは渡されたお茶をグイッと一息に飲み干して大きく深呼吸する。

「はあ……ふうー……では、アマテラス様。本題に入ります」

「うむ。聞かせてくれ」

「はい。先程、私の頭の中に突然ある映像が浮かびました」

ロゼンジ・メイガスは予言だけではなく、直近の未来であれば頭の中に映像として知覚することが出来る。

「どんな未来が見えたのじゃ？」

アマテラスは固唾を吞んでロゼンジ・メイガスの言葉を待つ。

「私達の先導者……ヴァンガードがこのユナイテッド・サンクチュアリに降り立ちました」

ロゼンジ・メイガスの言葉にアマテラスは目を見開き、ガタツと椅子から立ち上がった。

「それは誠か!？」

「はい。しかし、私達オラクルシンクタンクのヴァンガードだけではありません。同じくユナイテッド・サンクチュアリのロイヤルパラディン。“ドラゴン・エンパイア”のかげろう。“スター・ゲート”のノヴァグラップラーのヴァンガードも降り立っています」

「そうか……よし、ロゼンジよ。今すぐに戦闘教団のバトルシスターの何人かを引き連れて我らのヴァンガードの保護に向かうのじゃ！」

「はい！ あつ、ロイヤルパラディンのヴァンガードはどうなされますか？ 恐らく、私達のヴァンガードの近くにいると思われますが……」

「それなら心配ない。すぐに騎士王殿と連絡を取ってロイヤルパラディンから精鋭の騎士達を出すよう要請する。もし“奴ら”が現れたら騎士達と協力してヴァンガード達を必ず護るのじゃ」

「わかりました。それでは、すぐに向かいます！」

「頼むぞ、ロゼンジ！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスに一礼すると、部屋を飛び出してまた走る。

「ロイヤルパラディンの騎士王はともかく、ドラゴン・エンパイヤとスター・ゲートは耳を貸すかどうか……まあ、やるだけやってみるかの」

アマテラスはすぐに回線を開いてロイヤルパラディンの騎士王と連絡を取る。

同時刻、ユナイテッド・サンクチュアリに一際目立ってそびえ立つ城がある。

そこは、ユナイテッド・サンクチュアリを守護する人間、妖精（エルフ、フェアリー）、神（神族、エンジェル）で構成された正規軍・ロイヤルパラディンの本拠地である城である。

その城のとある執務室にて、一人の男がペンを器用に回しながら書類整理をしていた。

豪勢な机の隣には青と白の鎧と剣が置かれていた。

何を隠そう、この男が若くしてロイヤルパラディンを率いる最強の騎士にて、偉大なる騎士達の統率者“騎士王 アルフレッド”である。

すると、『ピピピ……』と突然外部からの連絡が入り、男性はペンを机に置いて連絡に出る。

「誰だ？ もしもし？」

『仕事中申し訳ないな、騎士王殿よ！』

連絡先がオラクルシンクタンク代表取締役のアマテラスにアルフレッドも驚く。

「一体どうなされたのですか？ アマテラス殿直々に連絡をくれるとは……」

『うむ、実はこの。今すぐにお主に伝えることがあるのじゃ』

「伝えること？」

『よく聞くのじゃ。お主達ロイヤルパラディンのヴァンガードが近々ユナイテッド・サンクチュアリに現れるのじゃ！』

「それは本当ですか!？」

『ロゼンジ・メイガスが見た未来の映像じゃ。間違えるわけがない！』

「わかりました。すぐに騎士団から精鋭騎士を派遣してヴァンガードの保護に向かいます」

『流石は騎士王。頭の回転が早い奴じゃ！ 今、ロゼンジ達がバトルシスターを連れて我らのヴァンガードの保護に向かっている。こちらも早急に頼むぞ』

「わかりました。それでは、失礼します」

『それじゃの！』

アマテラスは通信を切り、アルフレッドは椅子から立ち上がる。

（すぐに騎士達に召集をかけなければ……!）

アルフレッドは若干焦りながら置いてある鎧を身に纏う。

コンコン！ ガチャ！

「失礼します。騎士王、今度の模擬戦についてお話しが……」

ノックをしてアルフレッドの部屋に入ってきたのは、ロイヤルパ  
デインの精鋭騎士にしてユナイテッド・サンクチュアリの英雄“ブ  
ラスター・ブレード”である。

「ブラスター・ブレード！？ 全く、ナイスタイミング過ぎるぞ、  
お前は！！」

「……はい？」

ブラスター・ブレードはキョトンとし、目を丸くする。

「ブラスター・ブレード。模擬戦の話は後にして、今から緊急にし  
て重要な任務を言い渡す」

アルフレッドの騎士王としての重みのある言葉にブラスター・ブレ  
ードはすぐさま跪いき、一つ頷いた。

「承知しました、騎士王。それで、その任務の内容とは？」

「それは、この地に訪れた我々のヴァンガードの保護だ」

「ヴァンガード！？ では、彼が遂に……！！？」

ブラスター・ブレードは一瞬信じられないと言わんばかりの表情をする。

「これは、オラクルシンクタンクからの確かな情報だ。今、彼女達もオラクルシンクタンクのヴァンガードの保護に向かっている。ブラスター・ブレードよ。部下達を引き連れて我らロイヤルパラディンのヴァンガードの保護を命ずる」

「はっ！ この命と剣にかけて、必ず我らのヴァンガードを御守りいたします！！」

ブラスター・ブレードは腰に差した、名を受け継いだ同じ勇気を力に変える剣を持って騎士王に言う。

「頼むぞ。アマテラス殿も恐らく危惧している敵の襲撃も予測できる。すぐに向かってくれ！」

「はっ！！」

ブラスター・ブレードは返事をする、アルフレッドに一礼をして執務室から出る。

そして、数人の部下と一匹の相棒を引き連れてブラスター・ブレードは城から出撃する。

（待っている、マイヴァンガード。すぐに行く！）

### 第3話 覚醒した力と出会い（前書き）

今回、アイチ君が頑張ります！

そしてブラスター・ブレード達との出会いです！

### 第3話 覚醒した力と出会い

ユナイテッド・サンクチュアリの郊外の野原にて少年が眠っていた。その少年は地球の自室で眠っていたはずのアイチだった。

アイチは頬を撫でる優しい風に意識が覚醒し、ゆっくりと目が覚める。

「ん……んっ……」

「あっ！ アイチ、起きた？」

「ミサキ、さん……？」

アイチの顔のすぐ近くにミサキの顔があった。

（どうしてミサキさんが……？ そう言えば、枕の感触がいつもより良いような……）

「ふふっ。私の膝枕、どうかな？」

少し意地悪そうな笑みを浮かぶミサキにアイチは顔が少しずつ真っ赤になる。

ミサキは女の子座りをして、自分の膝にアイチの頭を乗せていた。

「えっ？ えっ？ ええっ！？」

アイチは慌ててミサキの膝から頭を離した。

「ミサキさん、ごめんなさい！」

「どうして謝るの？ 寝ているアイチに勝手に膝枕をしてあげたのは私だから、謝らなくて良いんだよ。こういう時に言う言葉はありますか？」

「えっ、あ、はい……ありがとうございます、ミサキさん……膝枕、凄く心地良かったです」

アイチは相変わらず顔を真っ赤にしながらミサキに礼を言い、ミサキは満足そうに微笑んで頷く。

そして、アイチは周りをキョロキョロと見渡す。

「ところで……ここはどこですか？」

「さあ？ 少なくとも、地球じゃなさそうよ」

「どうしてわかるんですか？」

「あれよ」

ミサキが指差した先をアイチが見る。

そこには、巨大な建物が幾つもそびえ立つ近未来的な国があった。

「あれは……もしかして……」

「ええ。私も信じられないけど……」

アイチとミサキは同時に頭に過ぎった答えを言う。

「「ユナイテッド・サンクチュアリ」」

自分の持つデッキの所属する国家がすぐ近くにあるのは普通に考えれば有り得ないことだが、アイチとミサキは直感でそれがユナイテッド・サンクチュアリだと分かった。

「これは夢かな……？」

「夢みたいだけど、現実みたいな感じがするよ……行こう、アイチ！」

ミサキはアイチの手を引いて走り出した。

「ミ、ミサキさん!？」

「早く早く! 夢が覚めない内に早く行こう!」

普段のミサキは気怠そうにしているが、今のミサキは年相応の可愛らしい笑顔をしていて、アイチにはキラキラと見えている。

(ミサキさん……とっても可愛いです……!)

アイチはミサキにバレないように俯いて顔を先程より更に赤くする。

アイチとミサキは早速ユナイテッド・サンクチュアリに入ると、二人の目はキラキラと輝いた。

「す、凄い……！」

「ここが、ユナイテッド・サンクチュアリ……！」

聖域国家と呼ばれるユナイテッド・サンクチュアリは近未来的な建物が広がり、無数の空間ディスプレイが宙に浮いていてニュースや宣伝が流れていた。

道行く歩行者達の服装もかなり変わっており、ここがアイチとミサキの住んでいる世界とは違うと実感できる。

「ミサキさん、オラクルシンクタンクの本部に行きませんか？」

アイチの提案にミサキはぱあつと輝く。

「えっ！？ いいの？」

「はい。僕は後でも良いので先にミサキさんからどうぞ」

「ありがとう、アイチ！ ああつ、本当に楽しみだな……」

ミサキは手を組んでオラクルシンクタンクのみんなに会えるのを心から楽しみにしていた。

「それじゃあ、まずは誰かにオラクルシンクタンクの本部の場所を聞きましようか」

「そうね。それと、ロイヤルパラディンの本拠地もね」

アイチとミサキは観光気分もとい、デート気分でユナイテッド・シンクチュアリを楽しもうとする。

しかし、この惑星クレイに呼ばれた意味をまだ知らないアイチとミサキに危機が迫る。

トガアアアアアン！！！！

突如、巨大な爆発音が鳴り、アイチとミサキは振り向いた。

「な、何ですか！？」

「爆発音……まさか、テロ！？」

そして、爆発の煙の中からおぞましい姿をした異形が現れる。

それは、凶悪な姿形の人型の化け物だったが、肉体の半分以上が機械に改造されたサイボーグでもあった。

「見つけたぞ……選ばれし先導者！！」

「生け捕りにしろ！　それが出来なければ殺せ！！」

異形は10体も存在し、目的はアイチとミサキだった。

「僕たちが狙い！？」

「逃げるよ、アイチ！」

ミサキはアイチの手を取って逃げようとする。

「逃がすか！　やれ、“ヘルビースト”！」

異形が叫ぶと、アイチとミサキの視線の先の地面が黒く変色して中からドロドロとした気色悪い液体を身に包んだ獣が現れた。

ヘルビーストは2体現れ、高速で駆けてアイチとミサキに襲いかかる。

「グルアアアア!!」

「きゃっ!?!」

「ミサキさん!?!」

ミサキはヘルビーストに襲われ、腕を爪で引っかれてそのまま後ろに倒れる。

アイチが慌ててミサキを受け止めるが、ミサキは苦痛の表情を浮かべていた。

「ミサキさん! 大丈夫ですか!?!」

「あつ、がつ……」

体が震え苦しそうに呼吸していて、話すこともままならない。

「まさか、あのヘルビーストの爪に毒が!?!」

「その通り。ヘルビーストの持つ毒は死には至らないが、数時間は肉体に凄まじい苦痛を味わうことになる」

異形がヘルビーストを手懐けてゆっくり二人に近づく。

「さあ、ヴァンガードよ。我らに投降しろ」

「……断る」

アイチは眼に怒りを込めながらミサキを片腕で抱きしめて、異形達を睨みつける。

「……仕方ない。ヘルビースト！」

異形はヘルビーストを離し、アイチに襲わせる。

アイチはゆっくり眼を閉じ、空いている右手を握りしめて自分の胸へと持つて行く。

（お願い……僕に……力を……！）

アイチの願いに反応し、体から青白い光の粒子が溢れる。

（ミサキさんを護るための力を僕に……！）

その願いに応えるようにアイチの握った手に一枚のカードがあった。

アイチは目を開いてそのカードを高く掲げた。

「立ち上がれ、僕の分身！」

アイチは青白い巨大な光に包まれ、その光は天を貫く。

異形やヘルビースト達はその光に立ちすくんでしまう。

そして、アイチは光を払うように叫んだ。

「ライド！ ブラスター・ブレード！！」

光が払われ、中から現れたのは、ブラスター・ブレードの剣を右手に持ち、鎧を身に纏ったアイチだった。

左腕でミサキを抱き上げており、ミサキは苦痛で意識が失いそうなか、変身したアイチの姿に驚きを隠せない。

（アイチ……？）

対峙する異形達は目の前で起きた事態に焦りの表情を見せた。

「くっ！ 早くもヴァンガードの能力を目覚めさせてしまったか！！」

「だが、まだその能力を扱い切れてないはずだ！ 今の内に叩けば問題ない。ヘルビースト！！」

ヘルビーストは牙をギラリと見せて再びアイチに襲いかかる。

（イメージするんだ。ブラスター・ブレードみたいに！）

アイチは頭に浮かんだイメージを実現するかのように剣を巧みに片手で操り、襲ってきたヘルビースト達を切り裂いた。

「何だと！？」

異形達が驚き、アイチは剣を高く掲げて呟く。

「行くよ……勇気を力に変える剣、ブラスター・ブレード」

剣の刀身が中心を残して左右に展開される。

そして、刀身から光が放たれ、巨大な光の剣へと変化して天まで伸びる。

「うおおおおおおおおおっ！！！」

アイチは一気に光の剣を振り下ろす。

「バースト・バスタアアアアー！！！」

光の剣は異形達に直撃し、一瞬の閃光が辺りを包み込んだ。

剣が纏う光が消えると同時に刀身が元に戻り、今の攻撃で大幅に体力を消耗したアイチは剣を地面に突き刺して杖代わりにする。

「はっ……はっ……やっつけた……？」

しかし、煙が晴れると信じられない光景があった。

「がっ、あっ……」

「貴様、ら……」

何と、異形達は自分の仲間を数体を盾にしてアイチの光の剣を受け止めたのだ。

「自分の仲間を盾に……！？」

「よくやったぞ。これでヴァンガードを簡単に捕まえることが出来る」

異形は盾にした仲間を無造作に捨てる。

「くっ……！」

アイチは歯を食いしばって無理矢理立ち上がり、剣を構え直す。

「今度こそお終いだ、ヴァンガード……！」

今度は異形達がアイチとミサキに襲いかかる。

「ロゼンジ・シールド……！」

突如、アイチとミサキの前に高密度の魔力で生成された巨大なひし形の防護シールドが現れ、異形達を弾いた。

「お待たせして申し訳ありません、ヴァンガードのお二方！ 私はオラクルシンクタンクのロゼンジ・メイガスです！」

アイチとミサキの前に現れたのは、ロゼンジ・メイガスだった。

その後ろに三人組のシスターがいた。

「私は戦闘教団の“バトルシスター もか”」

三人組のリーダーでミサキと同じように脚を見せる服装をしている  
“もか”。

「私は“バトルシスター ここあ””。よろしくね♪」

服の下にナイフを常備している戦闘教団一のサディスティックな性格の“ここあ”。

「わ、わ、私は“バトルシスター しょこら”！」

気弱そうな姿とは裏腹に機関銃を軽々と持つ“しょこら”。

「オラクルシンクタンクの皆さん……来てくれたんですね……」

アイチは思わぬ援軍に安堵の笑みを浮かべる。

しかし、ロゼンジ・メイガスは首を横に振る。

「いいえ。私達だけではありませんよ。ロイヤルパラディンのヴァンガード様」

「えっ？」

アイチの後ろに複数の足音が近づき、アイチはゆっくり振り向いた。

そこにいた人物達にアイチは一瞬だけ目を疑ってしまった。

それは、アイチが今までずっと会いたがっていたロイヤルパラディンの騎士達だった。

「遅くなって申し訳ありません、マイヴァンガード。私はロイヤルパラディンの光剣、ブラスター・ブレードです」

騎士達の先頭にはアイチの象徴にして切り札的存在のブラスター・ブレードがいた。

「我は……“沈黙の騎士 ギャラティン”……」

ブラスター・ブレードの後ろには両目を布で隠した魂を感じ取る騎士“ギャラティン”。

「僕は“小さな賢者 マロン”です！」

後ろにはブラスター・ブレード達より二回り大きい巨人族の少年“マロン”。

「俺はロイヤルパラディンハイビースト部隊の“ういんがる”だ！」

そして、ブラスター・ブレードの相棒の戦闘犬“ういんがる”が前に出て来た。

「ブラスター・ブレード、みんな……」

アイチは嬉しさのあまり、目から涙が流れる。

ブラスター・ブレードは一つ頷くと、眼を細めて異形達を睨む。

「貴様等だな？ 我らのヴァンガードを狙う輩は。だが、もうこれ以上手出しはさせない！」

ブラスター・ブレードは剣を両手で構える。

そして、その身から溢れんばかりの氣に異形達に思わず後ろに下がってしまう。

「ギャラティン、私と共に奴らを討つぞ！ ういんがるとマロンは後方支援とヴァンガード達を守れ……！」

「承知……！」

「おう！ やっちゃえ、ブラスター・ブレード……！」

「はい！ お任せください！」

ブラスター・ブレードからの指示にギャラティンとマロンというingarは頷いて位置に着く。

ロゼンジ・メイガスもバトルシスター達に指示を出す。

「もか、ここあ、しよこら。ロイヤルパラディンの騎士様と協力して敵を倒してください」

「わかりました、ロゼンジ様」

「お任せあれ……」

「は、はい!!」

バトルシスター達はブラスター・ブレードとギャラティンの隣に立つ。

すると、ロゼンジ・メイガスは手を伸ばしてミサキの傷に触れた。

「今、私の治癒魔法で傷と毒を癒やします」

ロゼンジ・メイガスは治癒魔法でミサキを苦しめる毒を消し、傷を癒やした。

「ミサキさん、よかった……」

苦しそうだったミサキの表情が穏やかになり、アイチも安心する。

そして、ブラスター・ブレードは剣を異形達に向ける。

「行くぞ!!」

ブラスター・ブレードが先陣を切って突撃し、ギャラティンやバトルシスター達が後に続く。

#### 第4話 お酒と酒癖と本音（前書き）

取りあえず、これでストックは使い切りました。

今回は……タイトルの時点で不安が（笑）

#### 第4話 お酒と酒癖と本音

それからブラスター・ブレード達は異形達を僅か数分で倒し、ユナイテッド・サンクチュアリに訪れた危機を退けた。

アイチとミサキはブラスター・ブレードやロゼンジ・メイガスがすぐに保護し、一体何が起きているのかを説明するため、ロイヤルパラディンの城に案内された。

城に設けられた一番大きな会議室に入ると、そこに驚くべき人物がいた。

「来たか。待っていたよ、マイヴアングード」

「おお！ よかった、無事であつたか！」

ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのトップ、騎士王 アルフレッドとCEO アマテラスである。

アルフレッドとアマテラスはアイチとミサキに近付いて握手する。

「ロイヤルパラディンの騎士王 アルフレッド。アルフレッドと呼んでくれ、マイヴアングードよ」

「あつ、は、はい！ よろしく、アルフレッド！」

「アマテラスじゃ。我のことは好きに呼んでくれて構わぬぞ」

「う、うん！ 私は戸倉ミサキよ。ミサキって呼んでね」

お互いの挨拶を済ませると、アイチとミサキを席に座らせてアルフレッドとアマテラスが説明を始める。

「全ての事の始まりはオラクルシンクタンクの予言者達の予言から始まった」

「予言……？」

アルフレッドの出だしから既にアイチとミサキは疑問符を浮かべる。

「その予言はこうじゃ……『未来から悪しき者達現れる時、人間界から我らを導くの先導者が現れる。そして、世界の存亡をかけた大いなる戦が始まる』……とな」

アマテラスの言う予言にアイチとミサキはハッとする。

「もしかして、その先導者は……」

「私達……？」

アルフレッドとアマテラスは同時に頷く。

「しかし、あなた達二人だけではない」

「現在、お主ら以外に他で確認できたヴァンガードはかげろうとノヴァグラッパの二つじゃ」

「かげろうとノヴァグラッパと言えば……」

「あの二人しかいないよね……」

アイチとミサキの頭には当然チームメイトの二人が思い出される。

「アマテラス殿。取りあえず、これからどうするかの話し合いは明日にして今日は二人を休ませましょう」

「そうじゃな、騎士王殿。心の整理も必要じゃからな。ミサキ、一緒にオラクルシンクタンクに行くぞ！」

「えっ？ えっと、その……」

ずっとオラクルシンクタンクに行きたかったミサキだが、何故か渋った。

「ミサキさん、どうしたんですか？」

アイチがミサキの顔をのぞき込むと、ミサキはアイチから視線を反らした。

「な、何でもないよ！」

そのミサキの反応にアマテラスは瞬時に気づいた。

（ほほう……なるほどのお。ミサキはあの男に……）

アマテラスは思わず顔のニヤケが止まらず、着物の裾で口を隠してアルフレッドの方を見る。

「騎士王殿、すまぬが今日はそちらでミサキを預かってもらえぬか

？ 残念ながら今日は我が社はいつもより忙しいのでな」

「ええ、私達は構いません。責任を持ってあなた方のヴァンガードをお預かりします」

アマテラスの思惑を全く知らないアルフレッドは平然と答える。

「感謝するぞ、騎士王殿。と言うわけで、ミサキよ。ロゼンジを世話係として残すから今日はこっちで泊まってくれるかの？」

「えっ？ べ、別に構わないけど……」

そして、アマテラスはミサキに近付いて耳元で囁く。

「良いか、ミサキ。惚れた男を自分のモノにするコツは大胆じゃぞ。特にこの男は気が弱そうじゃから今夜に夜這いでもすれば一発オーケーじゃ！」

アマテラスはグッドサインをしながらの爆弾発言に乙女心真っ盛りのミサキは顔が真っ赤になる。

「バ、バ、バカアアアアアアアッ！！」

「ゴブアッ！？」

ミサキは得意の蹴りでアマテラスを蹴り飛ばす。

「ミ、ミサキさああああああん！？」

「アマテラス殿おおおおおっ！？」

アイチとアルフレッドは突然の事態に目を見開いて驚愕する。

それもそうである。

大企業の社長が女子高生に蹴り飛ばされるなんて聞いたことも見たこともないのだから……。

その後、伸びているアマテラスはバトルシスター達に運ばれてオラクルシンクタンク本社に戻ったのだった。

そして、アイチとアルフレッドはミサキとアマテラスの間に何があったのか聞くのが怖かった。

聞いたらアマテラス同様に蹴り飛ばされと思ったからだ。

その夜、ロイヤルパラディンの城でヴァンガードのアイチとミサキの歓迎会が行われた。

広い食堂に多種多様にして個性豊かなロイヤルパラディンの騎士や剣士達、更には沢山のハイビースト達も参加して歓迎会は大賑わいだった。

歓迎会の主役のアイチはこの場にいるロイヤルパラディン全員に挨拶して回った。

今までも……そして、これからも共に戦っていくロイヤルパラディンの仲間達と絆を深めていきたいからだ。

アイチは挨拶を回り終えると、ジュースを持って一旦食堂を出て中庭に向かった。

既に日は落ち、ユナイテッド・サンクチュアリの夜空に星が広がっていた。

（本当に来たんだな、惑星クレイに……）

アイチはまだ夢の中にいるような気分だった。

「どうなされました？ ヴァンガードよ」

「あ、ブラスター・ブレード」

そこにアイチを探しにブラスター・ブレードが訪れた。

「あはは。ちょっと落ち着きたい気分だったからね」

「申し訳ありません。我が騎士団の者達はみんな、宴会が好物みたいなものですから」

「そうなんですか？」

「ええ。騎士王は特にお祭り騒ぎが好きで、何か良いことがある度にこうしてみんなで宴会をやるのですよ」

ブラスター・ブレードは自分の盟友の困った一面に苦笑しながらアイチの隣に立つ。

「へえー、何か意外ですね」

「幻滅なされましたか？ 誇り高き聖騎士団の実態をご覧になされて……」

「そんなことはありません！ 寧ろ、前よりもっとロイヤルパラデインのみんなが大好きになりました！！」

アイチは自分が本当にロイヤルパラデインが好きだという事をブラスター・ブレードに伝えるために満面の笑みを見せた。

「ありがとうございます。マイヴァンガード」

アイチの気持ちが伝わったブラスター・ブレードは微笑んだ。

すると、アイチは少し不機嫌な表情を見せた。

「あの、ブラスター・ブレード。そのヴァンガードって呼び方、止めてくれるかな……？」

「えっ？」

「さっき、挨拶する時にみんなにも言っただけど、僕のことをアイチって名前で呼んでくれるかな？ それから、敬語じゃなくて自

分の話しやすい言葉で喋ってくれないかな？」

「マイヴァンガード……」

「お願い、ブラスター・ブレード」

アイチは手を合わせてブラスター・ブレードに頼み込む。

「わかりました。では……ごほん！」

ブラスター・ブレードは咳払いをして敬語を止めて自分の言いやすい言語にする。

「改めて……これからよろしく頼む、アイチ」

「はい！ ブラスター・ブレード！」

アイチとブラスター・ブレードは握手して絆を深めた。

すると……。

「アイチ様〜！ ブラスター・ブレード様〜！」

ロゼンジ・メイガスがテテと走ってきた。

「どうしたんですか？」

「た、大変です！ ミサキ様が大暴走していますー！」

「……はい??？」

アイチとブラスター・ブレードはその意味を理解出来ていなかった。  
取りあえず二人はロゼンジ・メイガスの案内で食堂に戻った。

そして、そこには信じられない光景が広がっていた。

「ふははははあ！　こんなもの！？　ユナイテッド・サンクチュアリを守護する聖騎士は！！」

ワインボトルを片手に次々と騎士達を蹴り倒すミサキの姿があった。  
ミサキに蹴り倒されている騎士達の中にはロイヤルパラディンで名のある聖騎士が何人も含まれていた。

そして、一人、また一人とミサキに蹴り飛ばされて倒れていく騎士達の哀れすぎる姿……。

「バ、バカな……ロイヤルパラディンの騎士達が……」

「ロゼンジ・メイガスさん。一体何があったんですか……？」

「実は、騎士の皆様がミサキ様にアルコールの弱い果実酒を勧めたんです。アルコールが弱いなら大丈夫だろうとミサキ様も思い、一口飲んだら……」

後はもう聞く必要はなかった。

アイチ達はミサキの酒癖の悪さに呆然とするしかなかった。

しかし、さすがにこのままにしておくわけには行かないので、アイチが止めに行く。

「ミ、ミサキさん……」

「んう？ あ、アイチだあ！」

ミサキはアイチを見ると普段絶対に見られないような無垢な笑みを浮かべて足を下ろした。

「ねえ、アイチ！ このおしゃけおいしいよ！ 一緒にのもつよお！」

遂に呂律も可笑しくなりながらアイチに近づく。

「え、えっと……まだ僕は中学生ですから遠慮します……」

「むう！ 私のお酒が飲めないのかあー！」

「と、とにかく！ ミサキさんはもう飲んじゃダメです！」

アイチはミサキからワインボトルを奪い取り、そのままブラスター・

ブレードに投げ渡す。

「ああつ！ 何しゆるの、私のおしゃけえ〜！」

「ミサキさん、もう寝ましょう。部屋に連れて行きますから。ねっ？」

「むう〜〜っ！！」

ミサキは頬を膨らませながらアイチに連れて行かれた。

そして、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは同時にため息を付いた。

「何とか収まつたか……」

「ミサキ様にお酒を飲ませない方がよろしいですね。被害が尋常ではありません……」

「では、気を取り直して静かな場所でロゼンジ殿も一杯如何ですか？ 流石にここだと少々騒がしいですから」

ブラスター・ブレードはミサキが持っていた果実酒を見せる。

「はい、喜んで。ブラスター・ブレード様」

ロゼンジ・メイガスは若干頬を染めながら笑顔でその誘いを受けた。

一方、ミサキに用意された一室でアイチは疲れ果てていた。

「つ、疲れた……」

酔ったミサキを食堂から部屋まで連れて行くのに一苦労だった。

何故なら、突然暴れたり勝手にどこかに行こうとしたりとアイチを困らせた。

そして、やっとの思いで部屋に到着してベッドに眠らせたのだ。

「それじゃあ、お休みなさい。ミサキさん」

アイチは部屋から出ようとする。

しかし、

ガシッ！

「え？」

「行かないで……」

アイチはミサキに腕を掴まれて動けなくなる。

「ミサキさん……?」

「行かないで!」

「うわぁっ!?!」

そのままミサキに腕を引っ張られてアイチはベッドに引きずり込まれた。

そして、ミサキは両腕でしっかりとアイチの体をホールドして逃がさないようにする。

「ミサキさん、どうしたんですか! ……ミサキさん?」

アイチは暗くてよく見えなかったが、ミサキの目から小さく光るモノが流れるのが見えた。

「私、恐いんだ……」

「恐い……?」

「最初はユナイテッド・サンクチュアリに来て遊び気分だったけど、私達を狙ってあんな怪物達が襲ってきた……アイチやみんなのお陰で助かったけど、これからどうなるんだろうって、不安になるんだよ……」

強がって今さっきまで一切の弱い心を見せなかったミサキだが、ミサキも一人の少女……恐怖や不安は当然あるのだ。

「ミサキさん……」

アイチは無意識に手を伸ばしてミサキを自分の胸に抱き寄せた。

「アイチ……？」

「大丈夫です。ミサキさんは一人じゃありません。僕やロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクの皆さんがいます。必ず、僕がミサキさんを護りますから……」

「アイチ……ありがとう……」

ミサキの心から恐怖と不安が少し取り除かれ、そのままゆっくり眼を閉じて意識を手放す。

そして、アイチはミサキを抱きしめる力を少しだけ強くし、自分も眼を閉じて意識を手放した。

第5話 同盟作戦、開始！（前書き）

もうアイチとミサキさんがいちゃいちゃしすぎて申し訳ありません  
（笑）

## 第5話 同盟作戦、開始！

翌朝、太陽の光が窓から差し込み、ミサキは目を覚ました。

「んう……朝……？」

まぶたを何回も開け閉めして、意識を覚醒させる。

すると……。

「アイチ……？」

自分の目の前には可愛らしい寝顔をしたアイチが眠っていた。

ミサキは叫びそうになったが、落ち着いて昨夜のことを思い出す。

（えっと……確か昨日は歓迎会でお酒をちょっと飲んで、それから……）

断片的に記憶が残っているため、何とか昨日の出来事を思い出す。

（アイチに迷惑をかけちゃったかな……よし）

ミサキは手で髪を後ろに持って行き、アイチに顔を近づけた。

チュッ。

ミサキの唇はアイチの頬に重なり、小さな音が部屋に響いた。

そして、アイチの頬から唇を離し、自分らしくない行動にミサキは顔を真っ赤にする。

「はぁ……顔洗お……」

ミサキはため息をついて、ベッドから降りようとする。

「あれ……ミサキさん？」

「っ！？」

アイチも目を覚まし、ミサキは危うくベッドから落ちそうになった。

「ア、ア、アイチ！？ お、おはよう！」

「あ、はい。おはようございます。眠れましたか？」

「う、うん。ま、まあ、アイチのお陰でね。それじゃあ、支度をしようか？」

「わかりました。じゃあ、僕は自分の部屋に戻りますね」

「わかった、後でね」

「はい」

アイチはミサキの部屋から退出する。

廊下を歩いていると、アイチは手で頬に触れる。

（ミサキさんの唇、柔らかかったな……）

実はミサキがキスしている時にアイチは半分起きていて、キスの感触を感じており、未だにほのかに残っている。

頬だが、初めての異性のキスに朝の間ずっとドキドキしているアイチだった。

その後、支度をして合流したアイチとミサキは食堂で朝食をとった。

数十人の騎士がミサキを見てビクビクして怖がっていたのは気のせいではなかった。

朝食を食べ終わると、二人はアルフレッドに呼ばれて執務室に向かった。

「やあ、おはよう。二人とも」

「おはようございます、アルフレッド」

「おはようー。それで、何のようなの？」

「うむ。これからどうすればいいのか話し合おうと思ってな」

アルフレッドはソファアーにアイチとミサキを座らせ、カップにコーヒーを注いで二人に渡す。

「私達は未だに敵の正体を知らない。唯一分かっているのは、人間界から惑星クレイに召喚された君たちヴァンガードを貪欲に欲しがっていることだ」

「もしかして、櫛君やカムイ君も……」

「ああ。情報によると奴らに襲われたが、かげろつとノヴァグラッブラーの戦士達が追いついたようだ」

「よかった……」

「とりあえず二人は無事みたいね……」

アイチとミサキは仲間が無事だと知ってとりあえず一安心する。

そして、アイチはアルフレッドにある提案をする。

「アルフレッド、僕に一つ考えがあります」

「考え？」

「はい。かげろつやノヴァグラッブラーと同盟を組んだらどうですか？」

「なっ……！？」

アイチの提案にアルフレッドは驚愕して言葉を失う。

「予言で確かこう言っていましたよね？ 世界の存亡をかけた大いなる戦が始まるって……だったら僕達の敵は共通です。なら、同盟を組んで一緒に戦うのはどうですか？」

アイチの考えは道理にかなっているがアルフレッドは難しい表情を浮かべる。

「アイチ、君の考えは分かるが……かげろうとノヴァグラップライとの同盟は非常に難しいぞ」

「だから、僕達ヴァンガードがいるんですよ！ 櫛君とカムイ君と協力して僕達がそれぞれの組織を繋ぐ架け橋になるんです！」

「うっ……」

アイチの熱意に押されるアルフレッド。

「ふおおおお！ なかなか勇氣と行動力の少年ではないか、騎士王よ！」

そこに酒と杯を持った老人が外から窓へ侵入する。

「バロン殿！」

老人の名は“大いなる賢者 バロン”。

神々の時代から世界の全てを見続けてきた最古参の巨人族の賢者で

ある。

「騎士王よ。この子達の秘めたる可能性に賭けてみたらどうかの？」

「バロン殿、しかし……」

バロンは部屋に入り、片目を開いてアイチとミサキをじっくりと見る。

「ほほう、なかなか良い眼をした子じやの。まるで、若き日の騎士王達を思い出すのお」

傲慢の白髭に触れながらバロンは懐かしむように呟く。

そして、アルフレッドを見つめて自分の意見を言う。

「騎士王。わしは長きに渡りこの世界を見てきたが一度も世界が一つになることはなかった。今こそ、この幼き子達の力を借りて世界を一つにする時じゃぞ！」

「バロン殿……わかりました。私は彼らの可能性を信じて賭けてみます！」

バロンに説得され、アルフレッドは決意した。

「ふおおおお！　そうかそうか。さて、それではワシはそろそろ退散するかの。早くしないとあのやかましいのが——」

「失礼します！　こちらに賢者バロンが——ああっ！　見つけましたよ、お師匠様——！」

執務室に入ってきたのは、自称バロンの一番弟子であるマロンである。

「げっ！ もう見つかってしもうたか……では、さらばじゃ、騎士王！ とおうー！」

バロンは入ってきたのは窓から飛び降りてマロンから逃走する。

「あつ！ お待ちください、お師匠様〜！」

マロンはバロンを追い掛けて窓から飛び降りる。

「ええい、わしはお前を弟子と認めておらんわ！ いい加減、誰か別の師を見つけれ！」

「そんなことを言わないでくださいよ、お師匠様〜！」

バロンとマロンの巨人族師弟賢者（？）追いかけてこはまだまだ続きそうだった。

嵐のように訪れて去った二人を見送ったアイチ達は取りあえず話し合いを続ける。

「では、まずはかげろうとノヴァグラップラーで話しやすい方から攻めていこう」

「だったら、カムイのいるノヴァグラップラーから先が良いんじゃない？ アイチを兄として慕っているんだし」

ミサキの提案にアイチは頷く。

「そうですね。カムイ君なら話をすぐに分かってくれて協力してくれそうですから」

「決まりだな。すぐにノヴァグラップラーの本拠地である“スター・ゲート”までの船を用意する。二人はブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガス殿に今の事を話してくれ」

「はい！」

アイチとミサキは執務室から出ると、すぐにブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスに今の話を伝えた。

「そうか。騎士王が遂に決断したか……よし、今すぐに行動可能な者達を集める！」

「私もアマテラス様に連絡してバトルシスターを呼んでもらいます！」

こうして、未知なる敵に対抗するために今まで協力することのなかった巨大組織との同盟作戦が始まった。

ロイヤルパラインからはブラスター・ブレード、沈黙の騎士 ギヤラティン、ういんがる。

更に、ピンク色のハイビーストである“ふろうがる”が護衛に就く。

オラクルシンクタンクからはロゼンジ・メイガス、バトルシスターもか、バトルシスター　ここあ、バトルシスター　しよこら。

そして、ミサキと最も思い出のあるユニットが護衛に就いた。

「ツクヨミ……」

それは、小さな可愛らしい少女の姿をした女神“三日月の女神”  
ツクヨミ”である。

「ミサキ〜」

ツクヨミはテテと走り出してミサキに抱きついた。

「会いたかったよ、ミサキ〜」

「私も会いたかったわ、ツクヨミ」

「これからは私がミサキを守るからね！ ミサキに手を出す奴がい  
たらすぐに一拍子を呼んで最終形態になって倒すんだから！」

「頼もしいわ。ありがとう、ツクヨミ」

ミサキはツクヨミを優しく抱きしめる。

ツクヨミはミサキの亡くなった両親が生前残したデッキの切り札で  
あり、ミサキにとっては両親との大切な思い出そのものである。

そのツクヨミと出会えてミサキは本当に嬉しいのだ。

（良かったですね、ミサキさん）

アイチは微笑ましい光景を見守る。

そして、護衛のメンバーが揃ったところでスター・ゲートまでの移動手段をアルフレッドが見せる。

「これがロイヤルパラディンの技術開発部が造り上げた飛行機。その名も……“ペンドラゴン”だ！」

地面が真つ二つに割れ、中から巨大な飛行機が出現した。

最新鋭の魔法と科学によって造られたロイヤルパラディンの技術開発部懇親の力作である。

アイチ達が関心と驚きの表情をすると、アルフレッドはアイチに何かを渡す。

それは綺麗な輝きを放つサファイアの指輪だった。

「御守りです。ある魔法が込められているので困った時に役に立ちます」

「ありがとうございます、アルフレッド」

アイチは魔法の指輪を右手の人差し指に填める。

「武運を祈っています」

アイチ達はアルフレッドと別れてペンドラゴンに乗り込む。

それぞれが席に座ると、自動的にエンジンが起動して動き出す。

ペンドラゴンは目的地を設定すれば自動で向かう人工智能が搭載されているのだ。

ブラスター・ブレードが目的地を設定する。

「目的地は最南の大陸、スター・ゲート」

目的地の座標が設定され、ペンドラゴンは上昇してそのままスター・ゲートまで出発し、ユナイテッド・サンクチュアリを離れる。

そして、ペンドラゴンが見えなくなるまで見送っていたアルフレッドはある言葉を呟く。

「そう言えば、見送ると言っていたアマテラス殿はどこに行かれたのだろうか……?」

アルフレッドは疑問を持ちながら執務室に戻る。

その答えがペンドラゴンの中にあるとは知らずに……。

## 第5話 同盟作戦、開始！（後書き）

と言うわけで、次回からスター・ゲートに向かい、カムイ君と再会します。

かげろうのドラゴン・エンパイヤはその後になりますので、櫛君はまだ出ません。

## 第6話 最南の皇帝（前書き）

今回から題してスター・ゲート編です。

遂にカムイ君の登場です！

## 第6話 最南の皇帝

アイチ達はカムイの再会とノヴァグラップラーの同盟を組むために惑星クレイ最南の大陸、スター・ゲートに訪れた。

ペンドラゴンをスター・ゲートにある森に隠すと、アイチ達はノヴァグラップラーのスタジオがあるスター・ゲートの中心都市に向かった。

「わあ、ここがスター・ゲート」

「凄い、まるでSF映画の世界ね」

アイチとミサキはユニテッド・サンクチュアリとはまた違ったSF映画さながらの近未来都市に驚きと感動を得ていた。

ブラスター・ブレード達も初めて訪れる都市で同じ心境だった。

「なかなか面白い都市じゃの」

「……………えっ？」

後ろから聞き慣れた声が聞こえ、アイチ達が振り向くと、そこには動きやすい和服を見に包んだアマテラスが珍しそうに周りを見ていた。

「アマテラス様！？ どうしてあなた様がここにいるんですか！？」

ロゼンジ・メイガスが非常に焦って困った表情でアマテラスに問い

つめる。

「我は生まれてこの方、ユナイテッド・サンクチュアリから出たことがないのじゃ。良い機会じゃから、ミサキ達の護衛を含めて見聞を広めておこうと思つての。こつそりペンドラゴンに入つて隠れていたのじゃ」

アマテラスは扇子を広げて笑みを浮かべた。

そんなアマテラスの態度にロゼンジ・メイガスは沸々と何かがこみ上げてくる。

「この……大馬鹿社長！！！」

バコーン！

ロゼンジ・メイガスは所持している杖でアマテラスの頭を思いっきり叩いた。

「い、痛い！ なっ、何をするのじゃ、ロゼンジよ！？」

アマテラスは叩かれた頭を手で押さえてロゼンジ・メイガスを睨みつけるが、逆にロゼンジ・メイガスが鋭い眼孔で睨み返した。

「アマテラス様！ あなたは自分のお立場をわかつておられるのですか！？ あなたはオラクルシンクタンクの社長なのですよ！ その社長がこんな自分勝手なことをして許されると思うのですか！？ 今頃社内ではあなたがいなくなつて大騒ぎですよ！！」

ロゼンジ・メイガスはアマテラスの勝手な行動に激怒して説教をし

始めた。

「うつ、だって、だって……」

「だってじゃありません！ だいたいあなたは自分が社長だと自覚して——」

「はいはい、そこでストップよ」

ミサキがアマテラスとロゼンジ・メイガスの間に入る。

「ミサキ様……」

「ロゼンジ、気持ちは分かるけどもう良いんじゃない？」

「ですが……」

「ロゼンジ殿、それ以上アマテラス殿を怒られては可哀想です。その辺にしておいたら如何ですか？」

ブラスター・ブレードも加わり、ロゼンジ・メイガスはため息をついて遂に折れる。

「はぁ……わかりました。アマテラス様、ヴァンガード様達の護衛として同行するのはわかりましたが、すぐに本社に連絡してください。まずはそれからです」

「う、うむ。わ、わかったのじゃ……」

アマテラスは目尻に涙を浮かべながらコクコクと頷いた。

まるで、母親に叱られた娘みたいな光景だった。

（これじゃあ、どっちが上か分からないじゃないの……すっかりしなさいね、アマテラス）

オラクルシンクタンクの神の一柱であるツクヨミは苦笑を浮かべながら、やれやれと首を横に小さく振る。

それからすぐにアマテラスはオラクルシンクタンク本社に連絡して社員に無事だという事を伝えて、ノヴァグラップラーのスタジオムへと向かう。

アマテラスは惑星クレイの限られた人しか使えないブラックカードを取り出してスタジオムの高級チケットを購入した。

流星は大企業の社長だけあって、お金は余るほど所持しているのだった。

「さて、まずはカムイ君を探さないですね」

「そうだけど……どうやって？」

「それなら私に考えがあるわ！」

「ふろうつがる？」

ふろうつがるが何か考えがあるらしく、全員の視線が向けられる。

「アイチ達ヴァンガードは私達惑星クレイの住人とは全く違う匂い

を体から出しているのよ。それと同じ匂いを私と、ういんがるが探せばきつと見つかるわ!」

「ふーん、上手くいくのかよ?」

ういんがるが言つと、ふろつがるが声を強めて言つ。

「やるしかないでしょ! あんたも誇り高きロイヤルパラディンのハイビーストなら協力しなさい!」

「わ、わかったよ! それじゃあ……あつ、見つかった」

「「早つ!?!?」」

意外にもあつさりカムイの匂いを嗅ぎ付けた。

「クンクン。本当ね……皆さん、付いて来てください」

ふろつがるも匂いを嗅ぎ付け、ういんがると一緒にその匂いを追う。匂いを追うとそこはノヴァグラップラーの上級戦士達の部屋が集うエリアだった。

ノヴァグラップラーにとっては重要なエリアなので、当然警備員に止められる。

「ここから先は関係者以外、立ち入り禁止だ!」

「お客様、スタジオムにお戻り下さい!」

警備員はアイチ達を追い返そうとするが、ブラスター・ブレードとアマテラスが前に出る。

「失礼、申し訳ないがノヴァグラップラーの皇帝殿に伝えてはくれないか？」

「ロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのヴァンガードがノヴァグラップラーのヴァンガードに会いに来た、とな」

「そう簡単にカイザー様に伝えるなど……ヴァンガード？ はっ！  
？ 待て、あなた方はまさか！？」

「ユナйтеッド・サンクチュアリの英雄ブラスター・ブレード殿とオラクルシンクタンクの社長アマテラス殿！？ しょ、少々お待ちください！」

二人がユナйтеッド・サンクチュアリの大物人物だと知ると、警備員二人は急いで連絡を取った。

数分後、奥から小さな影が走ってくる。

「アイチお兄さん！ ミサキさん！！！」

その小さく元気な姿はアイチやミサキと同じく、惑星クレイに選ばれたノヴァグラップラーのヴァンガード、カムイである。

「カムイ君！」

「カムイ！」

「良かった、二人は無事で！」

「カムイ君も無事で良かったね」

「再会早々悪いけど、あんたに協力してもらいたいことがあるんだけど、良いかな？」

アイチとミサキは同盟の話をカムイにすると、カムイは親指を立ててグッドサインをみせる。

「オッケーです！　そう言うことなら喜んで俺様も協力します！！」

「ありがとう、カムイ君」

「それじゃあ、ノヴァグラップラーの皇帝に会わせませうね。付いてきてください」

カムイの案内で廊下の奥を進むと、数々のノヴァグラップラーの戦士の姿が彫られた巨大な扉があった。

扉を開くと、そこには一人のバトロイドがいた。

「カムイよ。客人の出迎え、ご苦勞である」

真紅の鎧を身に纏う六本腕の鬼神にしてノヴァグラップラーの皇帝“アシュラ・カイザー”である。

「お初にお目にかかれる客人殿。俺様はアシュラ・カイザー。このノヴァグラップラーの頂点に君臨する皇帝だ」

「アシュラ・カイザーよ。最近の経済状況はどうじゃ？ まあ、聞かなくてもわかるかの」

アマテラスが不敵な笑みを浮かべると、アシュラ・カイザーはケラケラと笑い飛ばす。

「あんたのお陰で毎日客が溢れかえって売上上々だぞ、アマテラスだが、まさかあんたが来るとは想定外だったかな」

「社長として見聞を広める為じゃ」

「なるほど。それで、今日は何のようだ？ 見たところ、ロイヤルパラデインの名のある騎士を二人も連れてきているとなると、何か重要な話らしいな」

アシュラ・カイザーはブラスター・ブレードとギアラティンを横目で睨みながら言う。

「まあ、お主にちょっとした話があるだけじゃ。悪い話ではないぞ」

「ふむ。お前がそう言うなら聞いてやるぞ」

アシュラ・カイザーは偉そうな態度を取るが、悪人ではないので、素直に同盟の話を聞く。

「なるほど、同盟か……確かに、カムイに襲ってきた敵は俺が今までに闘ったことのない奴だった。しかも、そっちの予言では大いなる戦が始まると出ている。予測しづらいこれからのことを悪くはない話だな」

アシュラ・カイザーはうんうんと頷き、同盟に同意的な態度を見せる。

だが、アシュラ・カイザーはブラスター・ブレードとギャラティンを見ると、ニヤリと少々不気味な笑みを浮かべながら立ち上がる。

そして、手を広げると部屋の壁に掛けられた六つの武器がアシュラ・カイザーの元に集まった。

「ブルアアアアアアアアアッ！！！！」

アシュラ・カイザーは全力でブラスター・ブレードとギャラティンに切りかかる。

「ギャラティン！」

「はっ！」

ブラスター・ブレードとギャラティンは鞘から剣を抜き、アシュラ・カイザーの攻撃を防ぐ。

「ロゼンジ！」

「ロゼンジ・シールド！！」

アマテラスが叫ぶと、ロゼンジ・メイガスが防護シールドを展開する。

「早く、私の後ろに！」

ミサキは防護シールドに向かうが、アイチとカムイはその場で立ち止まってアシュラ・カイザーに向けて抗議する。

「おい！ アシュラ・カイザー！ てめえ、何でいきなりブラスタ  
ー・ブレード達に攻撃するんだ！！」

「そうですよ！ あなたは同盟に同意するつもりは無いんですか！  
？」

「ふん！ 俺様はロイヤルパラディンに同盟するだけの力を確かめ  
たいだけだ！ 弱ければ同盟の意味が全くないからな！」

「そう言うことか……ならば！」

「我々の力を……証明するのみ！」

ブラスター・ブレードとギャラティンは全身に力を込めてアシュラ・  
カイザーの武器を押し返す。

「グオッ！？」

「ピンポイントバースト！」

ブラスター・ブレードの剣が左右に展開され、一筋の光線が射出さ  
れる。

光線はアシュラ・カイザーの短剣に直撃すると、粉々に粉碎する。

「やるな！ ユナイテッド・サンクチュアリの英雄！！ だが、ま  
だ俺様はこの程度では敗れん。行くぞ！」

「ういんがる、ふろうがる、後方支援だ！」  
フースト

「おうよ！ グルアアアアアッ！！」

「わかりました！ ワオオオオオン！！」

ういんがるとふろうがるは雄叫びを上げると、ブラスター・ブレードとギヤラティンに力を支援する。

アシユラ・カイザーは五つの武器にエネルギーをチャージして振りを上げる。

「ならば、俺様の最強技でケリをつけてやる！ 百撃必殺！！」

ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザーの必殺技が発動しようとしたその時だった。

キュイイイイーン！！！！

アイチの指輪が強烈な輝きを放ち、床に魔法の文字と科学の式が融合した陣が配置された。

「アルフレッドから貰った指輪が！？」

そして、陣は大きく広がると、中から何かが現れて飛び出した。

「グレートソードアタック！！！！」

斬撃が飛び、アシユラ・カイザーに直撃する。

「オバアアアアア！？」

斬撃をともに喰らい、ぶっ飛ばされるように壁に激突する。

「失礼。私の信頼する騎士達が危機に陥り、つい出てきて剣を振るってしまった」

「アルフレッド！？」

陣から現れたのはユナイテッド・サンクチュアリにいるはずのアルフレッドだった。

そして、アルフレッドが跨っているのは、燃えるような獅子のたてがみを持つ青い毛の名馬にして幻獣と呼ばれる騎士王の愛馬“ライオンメイン・スタリオン”。

「グオオオ……なるほど、貴様が歴代最強と謡われたロイヤルパラディンの騎士王か……」

壁に激突されたアシユラ・カイザーは不意打ちを喰らいながらも立ち上がった。

「お初にお目にかかれます。ノヴァグラップラーの皇帝アシユラ・カイザー殿。今までの話は全てアイチの指輪を通して全て聞いていました。そこで、私から一つ提案があります」

「提案だと……？ 言ってみろ！」

アルフレッドはにっこりと微笑む。

「はい。ノヴァグラップラーのバトルシステムの一つ、タッグバトルでこの話の決着をつけませんか？」

タッグバトル。

それは、二人一組でタッグを組んで闘う数あるノヴァグラップラーのバトルシステムの一つである。

「タッグバトル？ 貴様は誰と組むのだ？」

「はい。私のパートナーは……私の最も信頼する最高の騎士、ブラスター・ブレードです！」

「えっ！？ ア、アルフレッド！？」

ブラスター・ブレードは敬語を忘れて素に戻って驚いた。

そして数日後、ノヴァグラップラーの歴史に残る素晴らしい闘いが行われる事になるのだった……。

## 第6話 最南の皇帝（後書き）

次回、アルフレッド&ブラスター・ブレードのタッグでアシュラ・カイザーに挑みます！

ちなみに、アシュラ・カイザーのパートナーは……お楽しみにしてください！

## 第7話 聖騎士団VS格闘技集団（前書き）

やっと投稿です。

少しずつこの小説のカップリングが分かってきます（笑）

## 第7話 聖騎士団VS格闘技集団

アルフレッドの提案でブラスター・ブレードとタッグを組んで、タッグバトルでノヴァグラップラーの皇帝アシュラ・カイザーに挑むことになった。

アルフレッド達が勝ったら、ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーが同盟を組むことをアシュラ・カイザーは了承し、二日後にスタジアムで勝負することになった。

その夜、アイチ達はアマテラスが用意したスター・ゲートーの高級ホテルに宿泊した。

ホテルの一室でパーティーを行い、ワイワイガヤガヤと楽しむ中、ブラスター・ブレードは一人でテラスに向かい、スター・ゲートの夜景を眺めていた。

「どうした？ 辛気臭い顔なんかして」

そこに酒とグラスを持ってきたアルフレッドが訪ねる。

「……誰の所為だと思っている」

「はははっ。まあ、怒るなよ」

アルフレッドはブラスター・ブレードにグラスを渡して酒を注ぐ。

「アイチに渡した指輪はな、ロイヤルパラディンの城を繋ぐ転移魔法と通信魔法の術式が込められていてな。魔法水晶からお前とギヤ

ラティンがピンチになるのを見て居ても立ってもいられなくて、すぐにライオンメインを呼んで『俺、参上！』みたいな感じでな登場してみたわけだ」

「ったく……相変わらずカッコイイ登場をするよな、お前は」

ブラスター・ブレードはアルフレッドから酒を取って、グラスに注いだ。

そして、二人は乾杯でグラスを軽くぶつけて酒を飲んだ。

今、この場にいるのは騎士王と騎士ではなく、お互いに信頼する親友同士の二人だった。

「しかし、アルフレッド。本当にタッグバトルのパートナーは俺で良かったのか？」

「何を今更？ 俺のパートナーは昔からお前だけだよ。そして、これからもな」

「だが……相手はノヴァグラップラー最強の皇帝だぞ？ アシユラ・カイザーのパートナーも絶対に強敵だ。それを考えると――」

「とりゃあ」

パン！

「痛っ！？」

アルフレッドはブラスター・ブレードのでこにデコピンをする。

「何言ってんだよ。俺達は小さい頃から兄弟同然に育ってきた親友だろ？」

「アルフレッド……」

「それに、昔から一緒に戦ってきた俺達のコンビネーションは最強だ。違うか？ 相棒」

アルフレッドは全ての不安を風払うかのような安心できる笑みを浮かべ、拳を向ける。

その笑みにブラスター・ブレードの不安が消え、アルフレッドの拳に自分の拳をぶつける。

そして、そのままハイタッチをして固い握手をする。

「わかった。必ず勝とうぜ、相棒」

「ああ。俺の背中をお前に任せるぜ、相棒」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは互いに明後日の戦いへの決意を固める。

入れ替わりの形でブラスター・ブレードは部屋に戻り、アルフレッドはそのままテラスにいる。

「ふむふむ。話は聞かせて貰ったぞ、騎士王殿」

一体どこから現れたのか、グラスを持ったアマテラスがいつの間に

かアルフレッドの隣にいた。

「あはは、アマテラス殿に聞かれてしまいましたか。それにしても……まさか、あなたがペンドラゴンに乗っているとは驚きでしたよ」

「まあ、気にするでないぞ。それよりも騎士王殿」

「はい？ 何でしょうか？」

「必ずアシュラ・カイザーに勝つのじゃぞ。あのバトルバカを叩きのめすのじゃ！」

「ぶっ！ー！」

アシュラ・カイザーを『バトルバカ』と称したアマテラスにアルフレッドは思わず吹いた。

「あはは……わかりました、アマテラス殿。我が剣にかけて、必ず勝利します」

「うむ！ ところで……一つ良いかな？」

「何ですか？」

「そろそろお互い敬語とか止めないか？ 何だかんだで、我々の付き合いはかなり長いからの」

今まで敬語で話していた二人だったが、アマテラスが敬語を止めるように提案する。

もつとも、アマテラスはノーブルでかなりの長寿のため、口調は今まで通りだが。

「よろしいのですか？」

「うむ、許すぞ」

「では……アマテラス……で、良いかな？」

アルフレッドが敬語を止めて話しやすい言葉にすると、アマテラスは満足した表情で頷く。

「うむ。良いぞ、アルフレッド。それから……明後日のタッグバトル、頑張るのじゃぞ」

「ああ。任せてくれ」

二人はお互いのグラスに酒を注いで乾杯をする。

一方、アイチとミサキは別室で少々口論をしていた。

「アイチ、考え直して。幾ら何でも危険だよ！」

「ミサキさん……でも僕はブラスター・ブレードとアルフレッドと一緒に闘いたいです！」

さて、何故二人が口論をしているかというと、それはタッグバトルに関係していた。

アシュラ・カイザーが話し合いの時にある提案をしていた。

それは、ロイヤルパラディンとノヴァグランプラーのヴァンガードがタッグバトルの際に対戦者のどちらかに憑依して闘うものだった。アイチとミサキはついさっきまで知らなかったが、惑星クレイに選ばれたヴァンガード達は二つの能力を得ている。

一つ目は、自分の所有するデッキのクランのユニットの誰かに変身出来ること。

アイチがミサキを護るときにブラスター・ブレードの姿に変身したのもこの能力である。

変身したユニットの能力を100%そのまま使用することが出来るが、逆に弱点としては慣れてないと体力と精神力を大幅に消費してしまう。

二つ目は、対象のユニットに自らが憑依してそのユニットの持つ力を何倍にも増幅させ、秘められた力を覚醒させることができる。

アシュラ・カイザーはこの二つ目の能力をアイチとカムイが使用し、ロイヤルパラディンとノヴァグランプラーのそれぞれのユニットのどちらかに憑依して共に闘わせようとしているのだ。

カムイは是非闘いたいと自らが志願し、アイチもそれに賛同して志願しようとしたが、ミサキに現在止められている。

「何もアイチも一緒に闘うことは無いだろ！？それに、ノヴァグ  
ラップラーのバトルはかなり危ないって聞いたことがある……もし、  
アイチが大怪我をしたら……」

当たり前であるが、これはカードゲームのヴァンガードファイトではなく、真正銘本物の闘いである。

当然、怪我をすることも十分に有り得るため、ミサキは必死でアイチを止める。

「アイチもカムイもアシュラ・カイザーに乗せられているだけだ！  
いい加減目を覚まして！」

「……ミサキさん」

アイチは右手をミサキの頬に触れさせる。

ミサキはドキッと心臓の鼓動が早くなる。

「聞いてください。元と言えば、僕がこの同盟の話を提案したんですから、僕も闘わなければならないと思うんです。ミサキさん、僕を信じてください」

「アイチ……」

「お願いします」

アイチの瞳には強い意志が込められていた。

その強い意志をミサキは止めることは出来ないと理解した。

「……わかった。私はもう止めないよ。だけど、無茶して大怪我しちゃダメだ。それだけは約束して」

「はい！ それじゃあ、ブラスター・ブレードに話してきます！」

アイチはすぐさま部屋を出てブラスター・ブレードのところに向かう。

「全く……男は無茶をするんだから……」

残されたミサキはソファーに座り込んでため息をつく。

それから二日後、約束のタッグバトルが始まるうとする。

スタジアムには今回の対決を聞いてスター・ゲートからたくさんの観客が集まっている。

控え室ではアイチとブラスター・ブレードとアルフレッドが時間まで待機していた。

「頑張ろうね。ブラスター・ブレード、アルフレッド」

「ああ、共に全力を尽くすぞ」

「俺達は最高のチームだ。必ず勝てる！」

「うん。じゃあ、行きましょう！」

三人は控え室から出ると、ミサキ達が待っており、それぞれがアイチ達エールを送る。

ミサキからアイチへ。

「アイチ、約束……守って。無茶だけは絶対に止めてね」

「はい。行ってきます、ミサキさん」

ロゼンジ・メイガスとuingるからブラスター・ブレードに。

「ブラスター・ブレード様、御武運を祈っております」

「負けるんじゃないぞ、ブラスター・ブレード！」

「ロゼンジ殿、uingる。ありがとう、行ってきます」

アマテラスからアルフレッドに。

「頑張るのじゃ、アルフレッドよ」

「ああ。ん？ どうした、ライオンメイン」

すると、一緒に闘うことが出来ないアルフレッドの愛馬ライオンメイン・スタリオンはアルフレッドに頬擦りをして自分の気持ちを伝える。

『大きな怪我をせずに必ず勝って戻ってきてください、主』

「ライオンメイン……ありがとう。必ず勝ってくるからな」

アルフレッドはライオンメイン・スタリオンの獅子のたてがみを優しく撫でる

エールを送り終わると、アイチとブラスター・ブレードはお互いを見つめて握手をする。

「行くよ、ブラスター・ブレード」

「ああ。いつでも準備完了だ」

「うん。それじゃあ……ライド」

アイチの体は青白い光の粒子となり、ブラスター・ブレードの中に入る。

ブラスター・ブレードは一瞬だけ光ると、兜から青い前髪が出て、瞳がオーロラのように不思議な色になる。

《成功みたいだね》

ブラスター・ブレードの頭に直接アイチが語りかける。

「そうだな。不思議と体が軽い……これがヴァンガードの力か」

準備が完了し、アイチとブラスター・ブレードとアルフレッドはミサキ達と別れてその場を後にする。

遂にタッグバトルのスペシャルマッチのスタートが目前となり、スタジアムの観客の興奮は時間と共に上がってくる。

ノヴァグラップラーの実況者である“叫んで踊れる実況 シャウト”は選手入場の実況をする。

「ノヴァグラップルファンの皆様、お待たせしました！！ 遂に待ちに待ったタッグバトルのスペシャルマッチ！ このノヴァグラップラーの歴史に残る最高のバトルが始まります！ それでは選手入場です！！ まず始めに、我らがノヴァグラップラー最強の機械皇帝、アシュラ・カイザー！！！」

六本の腕に六つの武器を携え、皇帝としての空気を纏いながらアシ

ユラ・カイザーが威風堂々とスタジアムに入場する。

「そのアシユラ・カイザーとタッグを組むのは、煌めく黄金の機兵、ゴールド・ルチル!!!」

紺碧の装甲に双剣を携えたノヴァグラップラの無敗闘士“ゴールド・ルチル”がアシユラ・カイザーの後に続いてゆつくりとスタジアムに入る。

《ゴールド・ルチル。一緒に頑張ろうな!》

「ああ。ユナイトッド・サンクチュアリの英雄ブラスター・ブレード……闘うのが楽しみだ!」

ゴールド・ルチルの中にカムイが憑依している。

理由はアイチとブラスター・ブレードと闘うためにアシユラ・カイザーではなく、ゴールド・ルチルを選んだのだ。

「この夢のノヴァグラップラ史上最高タッグと戦うのはこの二人だ!」

ノヴァグラップラのタッグチームと闘うロイヤルパラディンのタッグチームが入場する。

「ユナイトッド・サンクチュアリを守護する聖騎士団ロイヤルパラディンに君臨する若き騎士王、アルフレッド!!!」

アルフレッドはアシユラ・カイザーと同じく、王としての空気を纏いながら威風堂々と歩いていく。

「そして、英雄と謡われ、この惑星クレイにその名を轟かせた聖域の光剣士、ブラスター・ブレード……！」

アルフレッドの横にブラスター・ブレードが共に歩いていく。

それぞれの思いが交錯し、ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーの闘いが始まる。

## 第7話 聖騎士団VS格闘技集団（後書き）

次回、いよいよタッグバトルスタートです。

ちなみに今回の組み合わせは騎士王降臨とトライアルデッキのそれぞれの目玉から対戦相手を考えてみました。

## 第8話 人間（ヒューマン）の可能性（前書き）

遂にロイヤルパラディンVSノヴァグラップラーの開幕です。

## 第8話 人間（ヒューマン）の可能性

ロイヤルパラディンとノヴァグラップラーのタッグバトルの両選手が揃い、シャウトは高らかに宣言する。

「それでは、両選手武器を構えて下さい！」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは鞘から剣を抜き、ゴールド・ルチルは鞘から峰が鋸のように細かい刃の双剣“ガルーダブレード”を抜く。

四人は武器を構え、アルフレッドはアシュラ・カイザー、ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルと対峙する。

「それでは、バトル……スタート……！」

ゴングがスタジアムに鳴り響き、四人は同時に動く。

「ブラスター・ブレード、そちらの戦士は任せた。早く倒してこっちの援護を頼むぞ」

「無茶を言う！ その言葉、そっくりそのまま返すぞ……！」

アルフレッドとブラスター・ブレードは小さく笑いながら剣を構えて走り出す。

「ゴールド・ルチル、ユナイテッド・サンクチュアリを代表するこの二人を倒して勝利の美酒を楽しむぞ……！」

「ええ、皇帝。ですが、私は勝利の美酒より彼と闘うことが何よりの美酒だ！」

ゴールド・ルチルは体勢を低くし、足に力を込めて一気に加速してブラスター・ブレードに近づく。

「私の名はゴールド・ルチル！ ブラスター・ブレードよ、いざ尋常に勝負！！」

《行きますよ、アイチお兄さん！》

「望むところ！ ブラスター・ブレード、全力でお相手致す！！」

《うん。負けないよ、カムイ君！》

ブラスター・ブレードとゴールド・ルチルは同時に剣と双剣を振り上げ、右足を強く踏み込んで同時に振り下ろす。

ガキーン！！！！

「くっ……！！」

「ぐおっ……！！」

三つの刃が交差して火花が散り、金属がぶつかる音が二人の耳を突き抜ける。

二人はそのまま腕に力を込めて剣を押し合うが、ヴァンガードをその身に宿して強化された二人の力はほぼ互角だった。

仕方なく二人はお互いの剣を弾いて距離を取る。

「強い……あの一撃でわかる。ノヴァグラップラーにこれほどの剣の使い手がいたとは……」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルの剣士としての実力の高さに僅かな驚きと恐怖を抱く。

《だけど、僕達は負けないよ。ね、ブラスター・ブレード》

「そうだな、アイチ」

ブラスター・ブレードは剣を両手から右手持ちに変えて後ろに持つて行き、剣を地面と水平にして平手突き of 構えをする。

「アイチ。少し速く動くが、我慢してくれ！」

アイチに忠告した直後、ブラスター・ブレードは全力で走り出してゴールド・ルチルに突撃する。

「突きか！　だが!!」

ブラスター・ブレードが平手突きをゴールド・ルチルは体を回転させながら紙一重で避ける。

「その程度の攻撃では私を討つことは叶わぬぞ、ブラスター・ブレード！」

回転した遠心力を利用しながらガルーダブレードを斜めに振り下ろす。

しかし、

「ふう……」

ブラスター・ブレードは突きを止め、そのまま体勢を低くして空いている左手を地面につき、左腕をくの字に曲げて逆立ちのするように体を逆に立たせる。

「せいっ、はっ！！」

左腕をバネのように一気に伸ばして体を高く跳ばす。

「何だと！？」

《嘘お！？》

予想だになかった動きにゴールド・ルチルとカムイは驚き、ガルドブレードは何もない空を切る。

「うおおおっ！」

跳んだブラスター・ブレードは体にかかる重力で地面に落ちながら大振りで剣を思いつ切り振り下ろす。

ギュルイン！！

「ぐむうつ！？」

剣はゴールド・ルチルの紺碧の装甲を切り裂いたかに思えたが、装

甲は予想以上に堅く、傷一つ付いてない。

しかし、装甲に覆われているゴールド・ルチルは斬撃の代わりに強い衝撃が体に伝わって一瞬だけ怯んだ。

（装甲が堅いなら零距离でぶち抜くしかない！）

ブラスター・ブレードは剣を左右に展開して中央の刀身をゴールド・ルチルの装甲にピタッとくっつける。

「ピンポイントバースト・ゼロブレイク！！！」

刃から光線が放たれ、それが砲撃のようにゴールド・ルチルを撃ち抜く。

「ぐおっ！？」

ゴールド・ルチルはピンポイントバーストの強い威力により壁に激突する。

「やるな！ ブラスター・ブレードよ！！」

激突した壁からゴールド・ルチルが瞬時に復活して現れる。

だが、復活したと言っても堅固な装甲にヒビが入っている。

「私の自慢の装甲をここまで壊したのはお前が初めてだ！！」

「なら、今度こそその鎧を壊してやる」

「だが私にも譲れないプライドがある。仕方ない……切り札を使わせてもらう。お前なら惜しくないからな」

「切り札……！？」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルの動きを警戒して一度後ろに下がって距離を取る。

すると、アイチが何かに気づいた。

《ブラスター・ブレード！ 体中に何かキラキラ光る物があるよ！》

「光る、物……？」

ブラスター・ブレードは両目で自分の鎧を軽く見た。

そこには黄金の粒子が付着しており、光を吸収して少しずつ大きくなっている。

「これは……ゴールド・ルチルの双剣から放たれる粒子？」

ガルダブレードから僅かだが刃から黄金の粒子が放たれるのを目視する。

「その通りだ。さあ、爆ぜよ！ パーティカルブラスト！！」

「何！？」

ブラスター・ブレードの体に纏わり付いていた黄金の粒子が一気に膨れ上がり、巨大な閃光となって爆発する。

ドカアアアアアアッ!!!

「がはっ!!!」

爆発物と化した黄金の粒子にブラスター・ブレードは宙に打ち上げられ、そのまま体が地面に叩きつけられる。

「くっ……がぁ……」

《ブラスター・ブレード……大丈夫……?》

「正、直……辛い、な……アイチは……?」

《僕もブラスター・ブレード程じゃないけど……体が熱くて痛い……》

ユニットに憑依したヴァンガードは、ダメージを受けたユニットの数割をその身に受けることになるのだ。

ブラスター・ブレードは鎧とその下に着ているアンダースーツでダメージを抑えられているが、アイチの体に症状の軽い火傷を負っている。

しかし、それでも二人の受けたダメージは大きい。

このままでは立ち上がって立つことも出来ない。

痛みで頭が真っ白になりかけたその時だった。

「アイチ——ッ！——！」

「ブラスター・ブレード様——ッ！——！」

アイチとブラスター・ブレードを呼ぶ二つの高い声が耳に届いた。

《ミサキ、さん……？》

「ロゼンジ殿……？」

真っ白になった二人の意識はすぐに覚醒し顔を横に曲げながら声のする方を見る。

観客席の一番前でミサキとロゼンジ・メイガスは目に涙を浮かべ、

身を乗り出しそうな勢いで叫んだ。

「負けないで……負けないで、アイチ!!」

「ブラスター・ブレード様、頑張って……頑張って!!」

ミサキとロゼンジ・メイガスの必死の声援にアイチとブラスター・ブレードの心に勇気を与えて、立ち上がる力が体に流れてくる。

《ブラスター・ブレード……!!》

「ああ……女の子に涙を流させるなんて、騎士失格だな。その涙を……笑顔にするために!」

アイチとブラスター・ブレードの心は一つとなり、剣を杖代わりにして立ち上がる。

《必ず……僕達は勝ってみせる!!》

「まだまだ……まだ俺は倒れないぞ、ゴールド・ルチル!!」

ブラスター・ブレードとアイチは剣を再び構え、ゴールド・ルチルとカムイに対峙する。

一方、アルフレッドとアシュラ・カイザーの闘いでは……。

「やっと起きたか。休憩は短めにしろよな」

ブラスター・ブレードが復活するとアルフレッドはため息をつきながら、アシュラ・カイザーの六つの武器による怒涛の攻撃をアルフレッドは華麗に避ける。

「まさか、ゴールド・ルチルのパーティカルブラストを喰らって立ち上がるとは……貴様といいブラスター・ブレードといい、ヒューマンとはいえ侮れないな」

「アシュラ・カイザー殿。ブラスター・ブレードを……否、私達ロイヤルパラディンを甘く見てもらっては困りますよ」

アルフレッドは剣でアシュラ・カイザーの武器を全て弾き返し、一旦距離を離す。

「私達ロイヤルパラディンの半数はヒューマンによって結成されています。しかし、私は考えるのです。ヒューマンには無限の可能性が有ると」

「無限の可能性、だと……？」

「そして、私達騎士は大切な何かを守るためなら、今よりもっと強くなれる」

アルフレッドのヒューマンと騎士の可能性をアシュラ・カイザーに

言い放った直後、

「アルフレッド、頑張るのじゃぞ!」

観客席からアマテラスがアルフレッドに声援を送っている。

アルフレッドは小さく笑みを浮かべると、剣を握り直してアシュラ・カイザーに向ける。

「行きますよ、アシュラ・カイザー殿。私もブラスター・ブレードやアイチと同じく簡単には倒れませんからね!」

「ふん! 小賢しい……俺様達バトロイドの力を貴様に見せつけてやるわ!」

ロイヤルパラディンの騎士とノヴァグラップラーのバトロイドとの戦いに遂に決着の時が近づく。

## 第8話 人間（ヒューマン）の可能性（後書き）

今回は二話連続投稿しましたので、次回に続きます。

## 第9話 ベストパートナー（前書き）

ノヴァグラップレーとの闘いが遂に決着です！

## 第9話 ベストパートナー

再び立ち上がったアイチとブラスター・ブレード。

自らの切り札を使って倒したと思ったゴールド・ルチルは啞然とする。

「まさか、あれを喰らって立ち上がるとは……」

《流石はアイチお兄さんだ!》

ゴールド・ルチルの中にいるカムイは嬉しそうに言う。

「なるほど。お前が兄と慕うヴァンガードか……面白い。最後まで全力で相手をしよう!」

ゴールド・ルチルも嬉しそうにして、ガルーダブレードを構え直す。

「行くぞ、アイチ!」

《うん、いつでも良いよ!》

ブラスター・ブレードは再びゴールド・ルチルに向かって走り出す。

しかし、ブラスター・ブレードは先ほどとはまるで別人のような動きをする。

（なっ!?!? スピードが増している!?!?）

あっという間にゴールド・ルチルの間合いに入って剣を振るう。

「うおおおおおっ!!」

《はあああああっ!!》

ブラスター・ブレードの動きが非常に速く、剣による荒々しい連続の攻撃をする。

あまりの疾風怒涛の猛攻に、ゴールド・ルチルは双剣で防御するしかなかった。

「うおおおおおっ、せいやっ!!」

ブラスター・ブレードはゴールド・ルチルのガルーダブレードを打ち上げると、そのまま胸の辺りに蹴りを打ち込んだ。

「ごがつ!？」

ゴールド・ルチルの装甲に入っていたヒビが更に広がり、膝を付く。対してブラスター・ブレードは攻撃を終えた瞬間、無理に動かした代償として体に激痛が走る。

「ぐっつ……」

しかし、ブラスター・ブレードは足に力を入れて倒れないように踏ん張る。

「どうやら、お互いの限界も近いようだな……」

ブラスター・ブレードは苦笑を浮かべる。

「ああ。そうだな……ブラスター・ブレードよ」

ゴールド・ルチルは立ち上がり、ブラスター・ブレードを睨みつける。

「お互い、ダメージも大きい。ならば、次の一撃で決めないか？」

言うなれば、自分の最強の一撃で勝負しようと言っている。

「良いだろう。これで……最後だ！」

ブラスター・ブレードは同意すると自身の持つ剣“ブラスターブレード”は刀身が左右に分かれる。

「この一撃に俺の全てを込める！」

ゴールド・ルチルの持つガルダブレードから大量の黄金の粒子を放つ。

「輝け、ブラスターブレード……！」

ブラスターブレードは刀身から巨大な光を放出し、それは美しい光の刃と化した。

その光はブラスター・ブレードとアイチの心にある“勇気”を変換させたモノである。

「震えよ、ガルーダブレード!!!」

黄金の粒子がガルーダブレード全体に付着し、黄金の双剣へと姿を変えた。

光の剣と黄金の双剣がスタジアムにいる者全てを圧倒させる。

そして、二人は同時に攻撃してその力をぶつけ合う。

「バーストバスタアアアッ!!!」

「ゴールドクロススラッシュ!!!」

光の剣が振り下ろされ、黄金の十字型の斬撃が飛ぶ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオッ!!!」

《はああああああああああああッ!!!》

「ウラアアアアアアアアアアアッ!!!」

《おりゃああああああああああッ!!!》

ブラスター・ブレードとアイチ、ゴールド・ルチルとカムイの叫び声がスタジアムに響く。

そして、光の剣と黄金の斬撃が弾け合って衝撃波が生まれ、ブラスター・ブレードとゴールド・ルチルを吹き飛ばす。

「ぐあッ!?!」

「どおっ!？」

衝撃波に吹き飛ばされた二人はスタジアムの壁に激突し、二人は全く動かなくなってしまう。

壁に激突した衝撃で体に大きなダメージを受け、ブラスター・ブレードは気絶し、ゴールド・ルチルは機能を停止してしまう。

「おおっと! ゴールド・ルチルとブラスター・ブレードが同時に戦闘不能になってしまった! この二人の戦闘は引き分けとなるのか!？」

実況のシャウトの説明にアルフレッドとアシュラ・カイザーは驚く。

「おいおい……早く倒して援護してくれって言ったじゃないか、相棒……」

相変わらず無茶を言うアルフレッドだった。

「ゴールド・ルチルと引き分けか……まあ、良い。俺様が貴様を倒せばそれで問題ないな!！」

アシュラ・カイザーは六つの武器にエネルギーを込めてアルフレッドに近付きながら六つの腕を振り上げる。

「百撃必殺! カイザー・バスター!！」

アシュラ・カイザーの六つの武器に百連撃の攻撃がアルフレッドに襲いかかる。

だが、しかし。

「残念ですが、あなたの必殺技は私には通りませんよ」

アルフレッドはアシュラ・カイザーの懷に潜り込んで百連撃のカイザー・バスターを回避する。

「何！？」

「私はヒューマンですからあなたに比べたら体は非常に小さい。ですから、懷に潜り込みやすいのです」

アルフレッドはロイヤルパラディン最強の騎士。

速力と機動力がヒューマンの中でもトップクラスの身体能力を持ち合わせているため、アシュラ・カイザーのカイザー・バスターを回避できたのだ。

「しまっ——」

「グレートソードアタック！！！」

アルフレッドは零距离で剣で薙払い、アシュラ・カイザーに魔力の斬撃を打ち込む。

巨体のアシュラ・カイザーをぶっ飛ばし、アルフレッドは追撃の斬撃を打ち込もうと再び剣を構え直したその時だった。

グサッ!!

「があっ!?!? ぐあああああっ!?!?」

アルフレッドの左足に突如激痛が襲いかかり、悲鳴を上げた。

アルフレッドの左脚の太ももが切れており、そこから大量の血が流れる。

そして、短剣が地面に刺さっており、刃にアルフレッドの血が付着していた。

「ふふふ……ただ攻撃を受けるだけじゃないからな。一矢報いさせてもらったぞ!」

その短剣は紛れもなくアシュラ・カイザーの物で、アルフレッドのグレートソードアタックを受けた瞬間に投げたのだ。

「くっ……」

（まさか左脚を狙うとは……アシュラ・カイザー、恐ろしい男だ……）

剣士にとって左脚は重要な部分。

そこを怪我したアルフレッドは満足に動いて剣を振ることが出来ない。

「騎士王よ、これで終わりだ!」

アシュラ・カイザーは立ち上がり、五つとなった武器で百連撃を与える。

(ここまでか……)

アルフレッドは諦めた表情を浮かべて目を閉じた。

「アルフレッド、剣を借りるぞ!」

「なっ!?!」

突然剣を取られ、アルフレッドの前に誰かが立つ。

「ブラスター・ブレード!?!」

それは、ゴールド・ルチルとの相打ちで戦闘不能になったはずのブラスター・ブレードだった。

ブラスター・ブレードはアルフレッドのグレートソードと自身のブラスターブレードを両手に持ち、アシュラ・カイザーに立ち向かう。

「英雄よ、騎士王ごと葬ってやるわ！ 百撃必殺！ カイザー・バスター……！」

「うおおおおおおおおおおお……！」

アシュラ・カイザーの百連撃攻撃をブラスター・ブレードは双剣を高速に操って防ぐ。

しかし、百連撃攻撃を完全に防ぎきることは出来ず、ブラスター・ブレードの鎧が破壊され、体に酷い切り傷が生まれる。

だが、ブラスター・ブレードは絶対に倒れない。

自分の後ろにいる騎士王を……相棒を……そして、掛け替えのない親友を守るためにブラスター・ブレードはアシュラ・カイザーに立ち向かう。

「はあああああああああ……！」

そして、体がボロボロになりながらブラスター・ブレードはアシュラ・カイザーの攻撃からアルフレッドを守り抜いた。

ブラスター・ブレードはブラスターブレードの刀身を左右に展開させて前に突き出す。

「ピンポイントバーストオオオッ!!」

光線をアシュラ・カイザーに向けて発射する。

「ゴバア!？」

光線が顔に直撃し、アシュラ・カイザーは後ろに倒れる。

「ブラスター・ブレード……お前……」

アルフレッドは呆然としてブラスター・ブレードを見る。

「全く……騎士王ともあろうお前が無様な格好を見せるな!」

《アルフレッド、大丈夫……?》

ブラスター・ブレードは借りたグレートソードを押し付けるように返す。

「俺がこんなボロボロになってもこうやって来たんだ! 脚をちょっと怪我したぐらいで、もう立てないとは言わせないぞ、アルフレッド!!」

ブラスター・ブレードはアルフレッドに活を入れる。

「ふっ……ふはははは! そうだったな……ありがとう。ブラスター・ブレード!!」

アルフレッドは左脚から来る痛みを完全に無視して立ち上がる。

「そうそう……それでこそロイヤルパラディンの騎士王だ。これでアマテラス殿もますますお前に惹かれるんじゃないか？」

「ばっ！？ なっ、何を言っただお前は！？」

《えっ！？ そうなの、アルフレッド！？》

ブラスター・ブレードの爆弾発言にアイチは驚く。

「俺にはバレバレなんだよ。この年上のお姉さん好きが」

「お前だって年上好きじゃないか！ ロゼンジ殿に——」

「アシュラ・カイザーの前にお前を斬るぞ？」

ブラスター・ブレードは鬼の形相でアルフレッドを睨み付ける。

「くっ、こうなったら、どっちが先に相手を射止めるか勝負だ！」

「何でそうなる！？」

アルフレッドが変な提案を出してブラスター・ブレードがツツコム。

「貴様等あああああああつ！ 俺様を無視するんじゃないやねえええええええええつ！！」

「ん？」「」

アシュラ・カイザーが怒号を挙げながら復活する。

《ブラスター・ブレード、アルフレッド、一緒にアシュラ・カイザーを倒そう!!》

「ああ、一気に叩く!!」

「俺達の力を一つにするんだ!!」

ブラスター・ブレードはブラスターブレードに勇気の光を、アルフレッドはグレートソードに数少ない魔力を注ぐ。

「これが最後の一撃……!!」

「外すなよ、ブラスター・ブレード!!」

「そっちもな。アルフレッド!!」

全ての力を剣に込め、勝利への一撃を放つ!

「ツインソード……オーバードライブ!!!!」

二人の剣から光の斬撃が飛び、それが一つの大きな光の斬撃となる。

光の斬撃は巨体のアシュラ・カイザーよりも大きく、アシュラ・カイザーは反撃出来ぬまま光の斬撃に飲み込まれた。

「ガアアアアアアアアアアア!!!!」

アシュラ・カイザーは絶叫をあげ、光が止むと同時に倒れる。

「っ……遂に決着ううううっ！ 長い激闘の末、ノヴァグランプ  
ラー最強タッグのアシュラ・カイザーとゴールド・ルチルを倒した  
のは……ロイヤルパラディン最強タッグのアルフレッドとブラスタ  
ー・ブレードタッグだあああああっ！！！」

シャウトの実況による、勝利報告に観客の興奮が最高潮に達し、声  
援がスタジアム中に響き渡った。

ブラスター・ブレードは左脚を怪我したアルフレッドの為に肩を貸  
し、二人は観客に向かって手を振りながら控え室へと戻る。

## 第9話 ベストパートナー（後書き）

次回からはバトルとは打って変わって甘々な展開が続きます（笑）

第10話 闘いの後の新たな戦い！？（前書き）

今回から甘々デート編（仮）が始まります（笑）。

權君登場のかげろっ編はまだ先になります、すいません！

## 第10話 闘いの後の新たな戦い！？

ブラスター・ブレードとアルフレッドが控え室に戻ると、三人の女性が迎える。

「ブラスター・ブレード様！ 大丈夫ですか！？」

「アルフレッドよ、左脚は無事か！？」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスが二人に駆け寄る。

そして、ミサキがブラスター・ブレードの中のアイチに話しかける。

「アイチ、大丈夫！？ アイチ！！」

すると、ブラスター・ブレードの体が一瞬光ると同時に青白い無数の粒子が飛び出てミサキの前で集まり、アイチとなる。

「ミサキ、さん……」

アイチは疲れと怪我から意識が朦朧としてしまい、そのままミサキに倒れ込む。

「アイチ！」

「ミサキ様、すぐに三人をベッドに寝かせましょう！」

ロゼンジ・メイガスの指示で、三人をベッドに寝かせると、すぐに三人の治療を始める。

しかし、治癒魔法を使えるのはロゼンジ・メイガスしか居ないので、まずは左脚を怪我したアルフレッドである。

下手をすれば左脚がもう動かなくなるかもしれない事態だったので、すぐに治癒魔法で斬られた場所を完全にくっつけて後遺症を残らないようにした。

「これで良し！ アマテラス様、後はお願いします！」

「任せるのじゃ！」

「ア、アマテラス……私はもう大丈夫ですから……」

「怪我人は黙ってるのじゃ！」

アマテラスはアルフレッドを黙らせて看病をする。

「お次は……」

「ロゼンジ殿、私よりアイチをお願いします」

ブラスター・ブレードは大怪我している自分よりアイチの治癒を頼んだ。

「で、ですが……」

ロゼンジ・メイガスが困った表情をしているとミサキはある事を思いつく。

（そうだ……私もヴァンガードなら！）

ミサキは自分の胸に手を置いてゆっくり目を閉じた。

「ライド！ ロゼンジ・メイガス！！」

声を強めて言うと、ミサキはピンク色の光に包まれた。

すると、ミサキは今着ている高校の制服の代わりに、ロゼンジ・メイガスのひし形に彩られた法衣を身に包んだ。

「ミサキ様……？」

「私がロゼンジ・メイガスになれば治癒魔法を使えるよね？ ロゼンジ、アイチは私が見るからあなたはブラスター・ブレードをお願い」

「あつ、は、はい！ それじゃあ、ブラスター・ブレード様。失礼します……」

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに治癒魔法をかける。

ミサキはアイチにゆっくり近づいた。

「ど、どうかな……？」

ミサキはアイチに今の姿の感想を尋ねる。

「ど、どうって……」

アイチは今のミサキの姿に目のやり場に非常に困った。

ロゼンジ・メイガスの法衣はとても露出度が高い。

両腕に腹と背中、更には脚まで肌をさらしており、本当に露出度が高い法衣だった。

それに、元々ミサキとロゼンジ・メイガスは顔がよく似ていて同じ銀髪であるため、とても似合っている。

「そ、その……とても可愛らしくて、似合っていると思いますよ……」

「ほ、本当か……？」

「え、ええ……」

アイチとミサキは顔を真っ赤にしながら話をする。

「じゃ、じゃあ……治療魔法をするね？」

ミサキはアイチの体の火傷した部分に触れて治療魔法をかける。

治療魔法はみるみるうちにアイチの火傷を治し、綺麗な肌に戻した。

「ありがとうございます、ミサキさん」

「他に火傷したところはない？　綺麗な肌なんだから全部治さなくちゃ」

ミサキはグイッとアイチに寄りかかるように近付いて火傷を探す。

アイチは露出度の高い服で密着してくるミサキに、顔全体が熱くなり真っ赤に染まる。

「だ、だ、大丈夫ですから、ミサキさん！」

アイチは片手で顔を隠しながらミサキを退かそうとする。

「あつ、暴れるな！ 危ないでしょ！？」

ミサキは退かそうとして半分暴れているアイチを押さえようとする。

激しく動いて応戦する二人。

すると、ミサキの法衣に不具合が生じる。

プチン！

「あつ！？」

「えっ？」

突然、ミサキの胸を覆っている法衣の金具が外れた。

パサッ……。

そして、布が床に落ちて……ミサキの豊かな胸が露わになる。

「ふわぁ……」

「キャ……キャアアアアアアッ！！！」

ミサキは絶叫しながら両腕で露わになった胸を隠す。

「アルフレッド、見るでない！！」

ブスッ！！

「ギャアアアアアアアアアアッ？！？！？！？」

アマテラスはアルフレッドの両目を指で潰す。

「目が……目があああああああつ！！！！」

両目に激痛を与えられ、視力を奪われたアルフレッドは両目を手で押さえながら悲鳴を上げる。

「ブ、ブラスター・ブレード様！ 見てはいけません！！」

対するロゼンジ・メイガスは動けないブラスター・ブレードの顔を掴んで自分の胸に持って行き、強く抱きしめた。

「ムゴオッ（ロゼンジ殿）！？」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスのミサキに負けない豊かな胸の谷間に顔を押し当てられる。

それにより、ブラスター・ブレードはまともに話すことが出来ず、それどころかロゼンジ・メイガスの胸の谷間に顔を押しつけられて

呼吸すらままならない。

そして、ミサキの胸を目の前で見ってしまったアイチは、顔がトマトのように真っ赤に染まり、脳が処理落ちしてしまう。

「ふにゃあ……」

アイチはベッドに倒れ込んで気絶してしまう。

ガチャ！

「失礼しまーす、お兄さん！ 大丈夫、です……か……？」

そこにカムイが控え室に入り、カオスになったこの状況に呆然とする。

「えっと……一体、何が……？」

このカオスの状況が収まるまでカムイは待つしかなかった。

約10分後、ようやくアイチやミサキ達は落ち着きを取り戻し、訪れたカムイの話を聞く。

「えっと、アシュラ・カイザーからの伝言です。『約束通り、俺達ノヴァグランプラーはお前達ロイヤルパラディンと同盟を組む。何か合ったときは共に助け合おう』。だって！ 良かったですね、お兄さん！」

アシュラ・カイザーからの同盟を承諾する伝言にアイチ達は安心と喜びの表情を浮かべた。

「ただ、同盟のことをノヴァグランプラー全員に正式に発表するにはアシュラ・カイザーは修理が終わってからになりそうです。修理は明日で終わるから、明後日の発表にはアルフレッドとブラスター・ブレードに来て欲しいって言ってましたよ」

「わかった、明後日の発表には喜んで行こう」

アルフレッドは頷いてアシュラ・カイザーの要望に承知する。

「それから、お兄さん！ 同盟発表が終わったら、俺も一緒に連れて行ってくれますか？ 俺、お兄さんやミサキさんと一緒に行きたいです！」

これからアイチ達と行動を共にしたいと頼むカムイ。

アイチとミサキは微笑んですぐに頷いた。

「うん。もちろんだよ、カムイ君！」

「私達チームQ4は誰も欠けるわけにはいかないからね。みんなと一緒に行くよ！」

「やったあ！ それじゃあ、俺はその事をアシュラ・カイザーに話に行きます！ みんな、お大事に！」

カムイは元気よく控え室を出て行ってアシュラ・カイザーの元に向かった。

アマテラスは立ち上がると、背筋を伸ばしてみんなに言う。

「さて、みんなの治療も終わったことだし、ホテルに戻るとするか」

そして、アイチ達はホテルに戻り、闘いを終えた三人の戦士はベッドに横たわって闘いの疲れを癒した。

その夜。

完全に心身ともに回復したアイチとブラスター・ブレードはアルフレッドに召集された。

「二人に集まってもらったのは他でもない。明日は何もないフリーだ。そこで！」

「「そこで？」」

「今から俺達が片思い（？）をしている女性に明日、デートに誘って距離を縮めるのだ！！」

アルフレッドは一体どこから持ってきたわからないホワイトボードを出現させ、『聖騎士デート大作戦！』とマジックペンでささっと書き上げた。

「デート大作戦って、アルフレッド……」

「僕、デートしたこと無いんですけど……」

「心配するな、アイチ。俺もブラスター・ブレードもデートをしたことがない。確か人間界では、『三人寄れば文殊の知恵』と言うことわざがあったな。きっと何とかなる！！」

アルフレッドの言っていることはまともに聞こえるが、その自信はどこから来るのか不思議でたまらなかった。

その後、アイチとブラスター・ブレードはアルフレッドに付き合いながら片思いをする年上の女性達のためにデートプランを考え、その日のうちにデートに誘いに行く。

「あ、あの、ミサキさん！」

「あ、アイチ？ どうしたの？」

まず始めにアイチから戦陣を切ってミサキを誘う。

「え、えっと……ミサキさん、明日……僕と……」

アイチは勇気を振り絞ってミサキを誘おうとする。

しかし、

「アイチ。明日、私とデートして」

「はい！　って、ええっ！？」

アイチが誘う前にミサキが言ってしまい、アイチは思わず返事をしってしまった。

「ちゃんとエスコートしてね、可愛い騎士さん」

ミサキはアイチに片目を閉じてウイングを送ると、そのまま軽い足取りで部屋に戻った。

陰からアイチを見守っていたブラスター・ブレードとアルフレッドは少々啞然とする。

「まさかミサキが先にデートに誘うとは……」

「まあ、結果オーライだから良しとしよう。さあ、次は——」

「ブラスター・ブレード様、そんな所で何をなさっているんですか？」

「アルフレッドよ、何をしているのじゃ？」

「——っ！？！？」

ブラスター・ブレードとアルフレッドが振り向くと、ロゼンジ・メイガスとアマテラスが不思議そうに見ていた。

「な、何でもありませんよ！」

（どうする、アルフレッド！）

「え、ええ。ブラスター・ブレードの言う通りです」

（仕方ない！ 少々計画が狂ったが今デートに誘うしかない！）

ブラスター・ブレードとアルフレッドはアイコンタクトで意志を伝えあい、ロゼンジ・メイガスとアマテラスをデートに誘おうとする。

だが、それよりも早く……。

「ブラスター・ブレード様、もし良ければ……明日、私と一緒に街へ出かけませんか？」

「アルフレッドよ！ 明日、私の買い物に付き合っのじゃ！ 嫌だとは言わせぬからの！！」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスが先にデートに誘ってきた。

「えっ！？ あ、は、はい！ 喜んで！」

「わかりました！ 喜んで買い物に付き合わせてもらいます！」

ブラスター・ブレードとアルフレッドは反射的に了解すると、ロゼンジ・メイガスとアマテラスは笑みを浮かべた。

「ありがとうございます。明日、楽しみにしていますからね」

「ふふふ、買い物に付き合った最後に褒美を捧げるから、楽しみに待つのじゃぞ」

ロゼンジ・メイガスとアマテラスはそう言い残すと、先ほどのミサキのように部屋に軽い足取りで部屋に戻る。

「……あれ？」

残された男三人は首を傾げてその場に立ち竦む。

実は、ミサキとロゼンジ・メイガスとアマテラスの女性陣三人も男性陣のようにデート作戦を考えていたのだ。

題して……『年下の可愛い騎士達を必ずゲットしよう大作戦!』である。

そして、明日一日は大波乱のデートとなるのだった……。

第10話 闘いの後の新たな戦い!?(後書き)

次回はアイチ×ミサキ、ブラスター・ブレード×ロゼンジ・メイガスのダブルデートです。

初々しく甘々なデートをお楽しみに(笑)

## 第11話 似た者同士のダブルデート（前編）（前書き）

甘々にするつもりがある宇宙人のせいで阻まれてしまいました。

ちよつと公式のコラボネタが入っています。

## 第11話 似た者同士のダブルデート（前編）

翌朝、アイチとブラスター・ブレードはホテルのロビーでソファア  
に座って待っていた。

待ち合わせの相手は昨日デートに誘うはずが、逆に誘われてしまっ  
たミサキとロゼンジ・メイガスである。

朝食の時にミサキとロゼンジ・メイガスの提案で、四人で一緒に出  
掛けることになり、ダブルデートをすることになったのだ。

ロビーで女性二人を待つアイチとブラスター・ブレードは少しオシ  
ヤレをしていた。

アイチは青を基調とした少し大人っぽい服装で、ブラスター・ブレ  
ードは聖騎士の鎧とアンダースーツではなく、黒のワイシャツとズ  
ボンに上着を着ている。

ちなみにこの服はあまり服を持ち合わせていないアイチ達の為にア  
マテラスが用意したものである。

そして……。

「アイチ、ごめん。待った？」

「ブラスター・ブレード様、お待たせしました」

準備を終えたミサキとロゼンジ・メイガスが訪れる。

ミサキとロゼンジ・メイガスは容姿が似ていて姉妹みたいなので、アマテラスはあえて服装を別々にしないで似た服装をチョイスした。

ミサキは白い清楚なワンピースに青のジャケットを羽織り、ロゼンジ・メイガスは薄いピンク色のワンピースに白のジャケットを羽織った可愛らしい姉妹のような服装だった。

その時、アイチとブラスター・ブレードは思った。

（（可愛い……））

と、思わず見取れてしまうほどである。

「それじゃあ、行こうか。アイチ」

「行きましょう、ブラスター・ブレード様」

ミサキとロゼンジ・メイガスはアイチとブラスター・ブレードの手を引っ張ってホテルのロビーから街へ出る。

ダブルデートを始める4人の後を三つの影が追いかける。

一つ目はブラスター・ブレードの相棒、ういんがる。

二つ目はふるうがる。

そして、三つ目はういんがるの上に跨って乗っているツクヨミである。

「なあ、ツクヨミ……本当に尾行するのかよ？」

「せっかくのデートを盗み見るのはちよつと……」

「イヤ！ ミサキがご執心のアイチって奴をこのデートで見極めるんだから！」

ツクヨミはアイチがミサキの相手に相応しいかどうか見極めるためにデートを尾行するのだ。

「ほら、早く行って！ ワンちゃん達！」

「「はいはい……」」

ツクヨミはういんがるの長い耳を引っ張り、二匹は仕方なくデートを尾行するのだった。

アイチ達はスター・ゲートで店が多く並ぶメインストリートに向かった。

そこで、まず洋服を見に行く。

最初はミサキとロゼンジ・メイガスの服を選んでいたのだが……。

「あ、あの……ミサキさん、ロゼンジさん……」

試着室のカーテンの間からアイチが恥ずかしがりながら顔を出す。

「アイチ、着替え終わった？」

「アイチ様、早く見せてください」

「うつつ……は、はい……」

カーテンを開けると、そこにはヒラヒラのスカートに可愛らしいハートが描かれたＴシャツを着たアイチがいた。

ミサキとロゼンジ・メイガスに是非着て欲しいとせがまれて、仕方なく着たアイチだが、違和感はなく、完全に美少女である。

「ふわぁ……凄く可愛いよ、アイチ」

「アイチ様、よくお似合いですよ」

アイチの美少女姿にうっとりとするミサキとロゼンジ・メイガス。

「……なるほど、これが有名な男の娘と言っやつか……」

女装から免れたブラスター・ブレードはアイチの男の娘の一面に憐れみと納得を覚えるのだった。

「……可愛いわね、アイチって……」

遠くから双眼鏡で見たツクヨミはアイチの可愛いさに目をぱちくりさせる。

「だけど、男からしたらかなり屈辱的だぜ……」

「仕方ないわよ。アイチはあの綺麗なお母さん似なんだから」

ういんがるとふろうがるはカードから見たことがある、アイチの母を思い浮かべる。

アイチ達はその後、様々なショップを渡り歩くと、まさかのヴァンガードのカードショップを発見してしまった。

「惑星クレイにもヴァンガードがあっただんですね……」

「ちょっと入ってみる？」

ブラスター・ブレードもロゼンジ・メイガスも興味を持ったので、4人で店の中に入る。

店にはスター・ゲートに住む宇宙人の子ども達がヴァンガードファイトをしていた。

しかも、驚くことに見たことのないクランを使用しており、アイチとミサキは戦ってみたくなった。

すると、アイチとミサキの手からロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクのデッキが現れる。

「ミサキさん、やってみます？」

「うん。ロゼンジ、良いかな？」

「ええ。私達は見えていますから良いですよ」

「二人のファイトを見学させてもらつよ」

ロゼンジ・メイガスとブラスター・ブレードから許可をもらい、アイチとミサキは早速誰かとファイトしようと空いている席を探す。

すると……。

「ケロケロリ！ その少年、我輩とヴァンガードファイトをするであります！」

小さな緑色のカエルに似た可愛い（？）宇宙人にアイチはヴァンガードファイトを誘われた。

「えっ？ 僕とですか？ 良いですよ」

「我輩はケロロ軍曹であります！」

カエルの宇宙人“ケロロ軍曹”は敬礼をする。

「僕は先導アイチです。よろしくお願いします」

「よろしくであります！ では……」

アイチとケロロはテーブルにファーストヴァンガードをセットする。

「「スタンドアップ！ ザ・ヴァンガード！」」

アイチはばーくがる、ケロロはバトルライザーにライドする。

ケロロはノヴァグラップラーはディメンジョンポリスの混合デッキを使用している。

そして、ケロロがヴァンガードをグレード2にライドする時、驚くセリフを言う。

「行くでありますよ！ 立ち上がれ、我輩の分身！ ライド！ “ブラスター・ケロロ” ！！」

「『『『えっ???』』』」

アイチ達は目を丸くしてブラスター・ケロロのカードを見る。

それは、目の前にいるケロロがブラスター・ブレードの剣を持ち、鎧を身に纏った姿だった。

「どうでありますか？ 我輩のブラスター・ケロロは！」

「は、はあ……？」

「ブラスター・ケロロでヴァンガードにアタックであります！ ブラスター・ケロロは自分の手札が相手より多ければパワーを+3000であります！」

「ノーガードです」

「ドライブチェック。ゲット、クリティカルトリガーであります！」

アイチのヴァンガードはブラスター・ケロロの攻撃を受け、山札の上から2枚のカードがダメージゾーンに置かれ、アイチのターンになる。

「それじゃあ、僕も……立ち上がれ、僕の分身！」

「ケロ？」

「ライド！ ブラスター・ブレード！」

アイチのヴァンガードは本家本物のブラスター・ブレードにライドする。

「ケロオーツ！？ ほ、本物のブラスター・ブレードでありますか！？」

「ブラスター・ブレードのカウンターブラスト！ ヴァンガードにライドした時、相手のリアガード一体を退却させます。ピンポイントバースト！」

ケロロのフィールドのリアガードが一体退却する。

「ま、まずいであります！」

「行くよ、ケロロ君！」

「うつ、ま、負けないであります！」

アイチとケロロのファイトは白熱した。

そして、

「ダメージが6枚……負けたであります」

「ありがとうございました」

結果、アイチが勝利し、ケロロはガクツとうなだれる。

「アイチ殿は強いでありますな。もし良ければ、ブラスター・ブレードのカードを見せてくれないですか？」

「良いですよ。なら、僕もブラスター・ケロロを見せてくれませんか？」

「もちろんであります！」

アイチとケロロはブラスター・ブレードとブラスター・ケロロをお互いに渡して眺める。

「カッコイイでありますな。ブラスター・ブレードは……ん？」

ケロロはブラスター・ブレードのカードとヴァンガードファイトを見ている男を見比べる。

「あれ……もしかして、あなたは！？ ブラ——むごっ！？」

ケロロは目の前にいる本物のブラスター・ブレードに口を塞がれた。

「しいーっ……あまり大声を出さないでくれるかな？」

ここで騒がれると色々面倒な事になりそうなので、ブラスター・ブレードはアイチとケロロを連れて店から出て人気の無いところへ行く。

「あなたは本物のブラスター・ブレードでありますか!？」

ケロロは目を輝かせながらブラスター・ブレードを見つめる。

「今は剣と鎧は無いけど、俺は正真正銘のブラスター・ブレードだよ」

「か、感動であります! あ、あの……一つお願いがあるであります」

「お願い? 何かな？」

「サ、サインをください!」

ケロロは色紙とサインペンを取り出してお願いする。

「サインか……書いたこと無いから下手かもしれないけど……」

ブラスター・ブレードはケロロから色紙とサインペンを受け取り、サイン色紙らしく自分の名前を書いてケロロに渡す。

「これでいいかな？」

「ケロー！　ありがとうございます！　それから、アイチ殿。カードは返すであります」

「うん。じゃあ、僕も返すね」

アイチとケロロはそれぞれのカードを持ち主に返し、ケロロは敬礼をする。

「それじゃあ、我輩は仲間達元へ帰るであります」

「うん。またね、ケロロ君」

「さよならであります！」

ケロロは手を振って走り出し、アイチ達と別れる。

「ブラスター・ブレード、ミサキさんとロゼンジさんの所に戻ろうか」

「そうだな。それにしても、あの宇宙人の少年とはまた合いそうな気がするな」

「僕もだよ。またケロロ君とヴァンガードファイトをしたいな」

そう言うと、アイチとブラスター・ブレードはカードショップに再び入り、ロゼンジ・メイガスと一緒にミサキのファイトを見る。

ミサキが見事白星を上げると、4人はカードショップを出てデートの続きをする。

.

第11話 似た者同士のダブルデート（前編）（後書き）

今回はこんなのでスイマセン（。。；）

次回こそは甘々のデート回にします！

第12話 似た者同士のダブルデート（中編）（前書き）

今回はとにかく甘くしてみました！

ブラスター・ブレード×ロゼンジ・メイガスです。

## 第12話 似た者同士のダブルデート（中編）

ダブルデートでショッピングを楽しんだ四人は夕暮れ時にちょっとオシャレなレストランで早めの夕食をとった。

夕食を食べ終え、四人はレストランから出ると、空は夜になって黒く染まり、月が昇っている。

「それじゃあ、また後で」

「今日中にはホテルに戻るから」

「二人とも、気をつけるんだぞ」

「お気をつけて」

アイチとミサキ、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスはその場で別れて後は別々で夜のデートを楽しむのだった。

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスはアイチとミサキを見届けると、反対側に向かって歩く。

「ロゼンジ殿。少し落ち着ける場所で休みませんか？」

「はい。わかりました」

そう言うと、ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは人気の無い近くの公園のベンチに座る。

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに顔を向けると、笑顔で頭を下げた。

「ブラスター・ブレード様、今日はありがとうございました。凄く楽しかったです」

「いえ、私も楽しかったですよ、ロゼンジ殿」

二人は今日のダブルデートのお礼を述べる。

すると、ブラスター・ブレードは夜空の月を眺めて呟く。

「そう言えば……ロゼンジ殿に始めて会った日もこんな月でしたね……」

「あら？　そうでしたっけ……？」

「私はよく覚えていますよ。あの日は騎士王になったばかりのアルフレッドが重要な書状を私に預け、真夜中にオラクルシンクタンのアマテラス殿に届ける時でした……」

ブラスター・ブレードはその日のことを鮮明に覚えている。

「まったく、アルフレッドの奴……こんな真夜中に手紙を届けさせるなんて。しかも相手はオラクルシンクタンクのトップ、CEOアマテラス……迷惑じゃないのか？」

ブラスター・ブレードは愚痴を呟きながら夜のユナイテッド・サンクチュアリの街を歩いていた。

「ま、明日は休みだから、とっととこれを届けて寮に戻って寝るかな」

そうこう言っている内にオラクルシンクタンクの本社の入り口に到着し、ブラスター・ブレードは気を引き締めて入ろうとする。

すると、

「あの、こんな夜遅くにどちら様ですか？」

後ろから声をかけられ、ブラスター・ブレードはとっさに振り向いた。

そこに居たのは、魔法の杖を携え、ひし形の多用した法衣を纏った銀髪の可愛らしい少女だった。

「エルフの魔術師……？」

エルフの魔術師の少女は月明かりに照らされ、ブラスター・ブレードの目には美しく見えた。

「もしかして、あなたはロイヤルパラディンのブラスター・ブレイ

ド様ですか？」

「はい。私はロイヤルパラディンの聖騎士が一人、ブラスター・ブレードです。騎士王からの急ぎの手紙をオラクルシンクタンクのCEOアマテラス殿にお渡しに参りました」

ブラスター・ブレードは礼儀正しい騎士の口調にしてここに来た理由を伝える。

「始めまして。私はこのオラクルシンクタンクの魔術師が一人、ロゼンジ・メイガスです。今からアマテラス様の社長室に行くので、ご一緒に如何ですか？」

「はい。よろしくお願いします」

ブラスター・ブレードはエルフの魔術師であるロゼンジ・メイガスの後に続き、アマテラスに手紙を渡しに行く。

手紙をアマテラスに渡すと、ロゼンジ・メイガスは入り口でブラスター・ブレード見送る。

「お疲れさまでした、ブラスター・ブレード様」

「いえ、これも仕事ですので」

「良かったら、ここに来た記念に私があなたの未来を占ってあげましょうか？」

「オラクルシンクタンクで名高い天才占い師が？ 是非お願いします」

「わかりました。では……」

ロゼンジ・メイガスは目を閉じて、杖の柄で軽く地面を叩く。

魔法陣がロゼンジ・メイガスとブラスター・ブレードの足下に現れ、オラクルシンクタンクに伝わる占術魔法を発動する。

占術魔法により、ロゼンジ・メイガスの脳裏にブラスター・ブレードの断片的で虚ろな未来が映る。

ロゼンジ・メイガスはゆっくり目を開けて、ブラスター・ブレードに未来を告げる。

「あなたはこれから何度も辛い戦いをすることになります。しかし、あなたは信じ合える仲間と共にその戦いを乗り越えられます。それと……」

ロゼンジ・メイガスは突然、頬を朱色に染めた。

「どうしました？」

「う、運命の人について……聞きたいですか？」

「運命の人……それは、私と生涯を共に生きる女性……妻のことですか……？」

「は、はい……」

頷くロゼンジ・メイガスにブラスター・ブレードは小さく苦笑を浮

かべる。

「そうですね……まあ、気になりますから一応お願いします」

ロゼンジ・メイガスはゆっくりとブラスター・ブレードの運命の女性を告げる。

「その女性は……エルフで……」

「エルフ？」

「そして、ぎ、銀髪の魔術師です……」

「……………え???」

「し、失礼します！　ブラスター・ブレード様！　またお会いしましょう！」

ロゼンジ・メイガスは焦りながらブラスター・ブレードに一礼して走りながら会社に戻る。

「ロゼンジ・メイガスか……」

ブラスター・ブレードは頬を指でかきながら月を見上げる。

昔話を聞いて、ロゼンジ・メイガスは耳まで顔を真っ赤にした。

「そ、そんな事もありましたね……」

「ちなみに……あの占いは本当だったんですか……？ 未だにちょっと信じられなくて……」

「私は自分で占ったことを正直に話します。占術魔術を使う者として、嘘は付きません！」

ロゼンジ・メイガスは声を強めて自分の誇りをブラスター・ブレードに伝える。

「す、すいません……じゃあ、その占いが本当なら……」

「えっ？ キャッ！」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスの腰に手を回して抱き寄せる。

「ブ、ブラスター・ブレード様……？」

「私はあの日以来、あなた以外でエルフの魔術師を見たことはありません。つまり……」

そこから先はブラスター・ブレードが言う必要はなかった。

ロゼンジ・メイガスは人差し指でブラスター・ブレードの唇を閉じた。

「私は……小さい頃に占術魔法で自分自身の運命の人を占いました。その人は誰よりも勇気を持っていて、誰かを護るために戦う人。私が彼を始めて見たのはあなたが剣の名前を受け継いだ時でした。でも……」

ロゼンジ・メイガスは手を組んで自分の胸に持つて行く。

「英雄と呼ばれる彼では私は釣り合わないと思い、密かに想いを抱きながら諦めかけていました。しかし、あの日の夜に私と彼は出会いました……」

その時から二人は頻発に会うようになり、ロゼンジ・メイガスの諦めかけた想いが再び芽生えて膨らんだ。

「今ならちゃんと言えます……ブラスター・ブレード様。私は――」

ロゼンジ・メイガスは自身の心にある勇気を奮い立たせる。

「私は……あなたを愛しています。ブラスター・ブレード」

ずっと想い続けたロゼンジ・メイガスの告白。

対するブラスター・ブレードは心を乱さず、冷静に自分の想いをロゼンジ・メイガスに伝える。

「ロゼンジ殿。いや、ロゼンジ・メイガス。俺は始めて会った時からずっとお前に惹かれていた——」

ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスの頬に両手を添える。

そして、自分の唇を優しく、甘くロゼンジ・メイガスの唇に重ねる。たった数秒間のキスだが、二人にはそれが何分にも感じ、ゆっくりと唇を離し、ブラスター・ブレードはロゼンジ・メイガスを見つめる。

「俺もあなたを愛している。ずっと、俺の側にいてくれ」

お互いの口から出された愛の告白。

ロゼンジ・メイガスはブラスター・ブレードに抱きつき、耳元で言

う。

「はい……私はずっと、あなたの側で愛し続けます」

「ありがとう……」

ブラスター・ブレードは両腕でロゼンジ・メイガスを優しく抱きしめた。

運命によって巡り会えたヒューマンの騎士とエルフの魔術師。

その愛は大いなる禁忌なのかもしれない。

だが、この二人の愛はやがてユナイテッド・サンクチュアリの未来を守る新たな光を生み出すこととなる。

第12話 似た者同士のダブルデート（中編）（後書き）

アイチ×ミサキは次回です。

こちらも甘さを追求しますので！

**第13話 似た者同士のダブルデート（後編）（前書き）**

アイチ×ミサキさんの甘々小説です。

まだまだスター・ゲート編は続きます。

### 第13話 似た者同士のダブルデート（後編）

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスと別れたアイチとミサキはスター・ゲートの街に点灯されたイルミネーションを楽しみながら歩いていた。

「イルミネーション、綺麗ですね」

「うん。とても不思議な光……スター・ゲートの技術で造られたみたいだね」

「あつ、ミサキさん。そのベンチで休みませんか？」

「そうだね。ちょっと休もうか」

二人は近くにあったベンチに座り、様々な色の光に変化するイルミネーションを楽しむ。

アイチは横目でミサキを見る。

イルミネーションを見るのに夢中になっているミサキにアイチは拳を作る。

（い、言っただ。ミサキさんに、僕の想いを！）

「あ、あの、ミサキさん！」

「ん？ どうしたの？ アイチ」

「僕……ミサキさんに伝えたい気持ちがあるんです！」

真剣な眼で自分を見つめてくるアイチにミサキはドキッと心臓の鼓動が激しく高まる。

「な、何……？」

これから聞くかも知れないその言葉をミサキは緊張しながらアイチの言葉を待つ。

「僕は始めてミサキさんに会った時……気の強いちょっと怖いお姉さんだと思いました……」

普段のミサキならここですぐに怒っているだろうが、緊張していてそれどころではなかった。

「でも、ミサキさんと一緒にヴァンガードファイトをしたり、お話をしていく内に……僕はミサキの優しいところ、可愛いところをたくさん知りました」

可愛いと言われ、ミサキは頬を赤く染める。

アイチも頬を赤く染めながら自分から見たミサキに対する想いを紡いでいく。

「僕はだんだん、頭の中がミサキさんで埋め尽くされていくんです」

「アイチ……」

そして、アイチはギュッと目を閉じて大声で自分の秘めた想いをミサキに伝える。

「僕は……ミサキさんが好き、大好きです！！僕はまだ弱いけど、必ず強くなってミサキさんをずっと、ずっと護っていきます！！」

告白したアイチは未だに眼を閉じながらミサキの返事をじっと待つ。

すると、ミサキはアイチを優しく抱きしめて耳元で囁く。

「アイチ……あんたの気持ちは伝わったよ。私も……アイチが大好きだよ。でも……」

「でも、何ですか……？」

アイチはミサキの表情を見ることは出来ないが、悲しい表情をしているのは何となくわかっていた。

「私は両親が亡くなってからずっと何かを失うのを恐れていたんだ。だから……私が大好きなら約束して」

「は、はい。どんな約束ですか？」

「絶対に……私より先に死なないでね。もしアイチが先に死んだら絶対に許さないんだから……」

大切な何かを失うことの恐ろしさを一番理解しているミサキ。

アイチは抱きしめているミサキを離してジッと見つめる。

「約束します。僕は絶対にミサキさんより先に死にません。ミサキさんを……幸せにします!!」

アイチは自分の覚悟をミサキに伝えたと、アイチは自分の唇をミサキの唇へと重ねた。

ミサキは突然のキスに驚いたが、抵抗は一切しないでアイチと唇を甘く激しく重ねる。

「んう……ふわう……ミサキ、さあん……」

「んちゅ……むう……アイ、チ……」

二人は唇の間から舌を入れて絡み合わせるディープキスへと発展させる。

そして、お互いの唇と舌を離すと、唾液の銀色の糸が繋いでプツンと切れる。

「ミサキさん……」

中学生には刺激の強すぎるディープキスに意識がトロンとなつてしまふアイチにミサキは自分の胸に抱き寄せた。

そして、ミサキは何故か余裕で不敵な笑みを浮かべながらアイチを離さないように抱きしめる。

「アイチ。あんたは私と一緒に寝て、私の胸を見たわよね？」

「えっ？　そ、そうですけど……」

どちらもミサキの責任が半分ほどあるが、事実である。

「だから、責任は取ってもらうからね」

「責任……？」

「そう……アイチは私だけのモノ。私の嫁になつてもらふよ」

「えっ？　嫁つて……僕は男だから婿なんじゃ……」

「アイチは女の子みたいに可愛いから私の嫁でいいのよ、それに、アイチに拒否権は無いからね」

ミサキはアイチの頬や額、そして首もとにキスをたくさん落として

自分のモノだという証を刻んでいく。

「ひゃあ……あうっ……」

「ふふふっ。アイチ、可愛い……」

喘いでいるアイチにミサキは興奮していく。

そんな時だった。

「こんにゃろおおおおおおおっ!!」

「えっ?」

夜空を見上げると、怒りに燃え上がっていた神々しい光を放つツクヨミの最終形態“満月の女神 ツクヨミ”がいた。

「ツ、ツクヨミ!」

「しかも満月の女神に!」

「に、逃げろ……アイチ……」

「早くしないとツクヨミに殺されるわ……」

そこにボロボロになったういんがるとふろつがるがやって来た。

言わずもがな、ツクヨミを止めようとしてこつなつたのだ。

「二人とも、大丈夫!？」

「あんたは……男なのになんで女みたいなのよ!!!」

ツクヨミの首にかけてある夜の闇を払い去る神器“月影の勾玉”が聖なる光を放つ。

「月影の勾玉!!!」

その光はアイチだけに向けられ、降り注がれる。

（あれだけは防がなきゃ危ない!）

「ライド! 閃光の盾 イゾルデ!!!」

アイチはロイヤルパラディンの守備を担当している呪装を施した巨大な盾を持つ女性騎士、イゾルデにライドする。

イゾルデに変身したアイチはあらゆる力の攻撃から守る閃光の盾を起動し、ツクヨミの月影の勾玉の光を防ぎきる。

だが、それが逆にツクヨミを怒らせることになる。

「今度は女の子騎士かあああああああああつ！！！！」

「ツクヨミ止めなさい！！！」

ミサキが叫んでツクヨミを叱りつける。

「どうして私のアイチを傷つけようとするの？ 答えて、ツクヨミ！」

「私は……ミサキの幸せを願いたい。だけど、ミサキが選んだその男は全然男らしくないじゃない！ 寧ろ女の子みたいだし！ だから許せないのよ！ ミサキを守るくらい強くてカッコイイ男じゃないと認められないのよ！！！」

「そんな事はない！ アイチは……優しくて可愛いところがあるけれど、強くてカッコイイところもあるんだから！！！」

「だったら……先導アイチ！ 私と勝負しなさい！」

ツクヨミは剣の宝具をアイチに向ける。

しかし、アイチは首を横に振ってイゾルデの変身を解いた。

「お断りします」

「なっ！？ 何だよ！ 私と戦うのが怖いの！？」

「違います。僕はミサキさんの大切な人と戦いたくありません。でも、これだけは約束します」

「約束？」

「僕は……大好きなミサキさんを必ず護ります！ 例えどんな事があっても必ず護ります！！」

アイチはミサキの手を握ってツクヨミに宣言する。

「先導アイチ……」

強い意志と力が秘められた瞳にツクヨミは宝具を下ろす。

そして、ツクヨミの体が一瞬光ると、身に纏った神器と宝具が消えて三日月の女神 ツクヨミとなる。

ツクヨミの後ろに光の神に付き従う聖なる御使いの蒼い鷹“神鷹一拍子”が現れる。

「先導アイチ、あなたの覚悟は伝わったわ。私もミサキを守るけど…… あんたは必ずミサキを護ってね。約束よ」

「はい。約束します！」

それは、ミサキを大切に想う二人の約束。

仲直りをした二人にミサキは優しく微笑んだ。

その後、アイチとミサキはボロボロになったういんがるとふろりがるを抱き上げ、ツクヨミは一拍子の背中に乗ってホテルへと戻る。

アイチとミサキはお互いの手の指を絡ませる恋人繋ぎをしながら二

人は歩いていく。

.

第13話 似た者同士のダブルデート（後編）（後書き）

どうでしたか？

アイチとミサキさんの甘々話は？

次回はアルフレッドとアマテラス様のデートです！

もしかしたらR18の小説を書くかもしれません（笑）

## 第14話 騎士王とCEOの甘々デート？（前書き）

今回はアルフレッドとアマテラス様のデートです！

こちらは別の意味で甘いのでコーヒーの用意を（笑）

## 第14話 騎士王とCEOの甘々デート？

騎士王 アルフレッド。

ユナイテッド・サンクチュアリの正規軍、ロイヤルパラディンを統べる王で歴代最強の騎士と謳われている。

CEO アマテラス。

大企業オラクルシンクタンクの代表取締役で、類稀な経営力・統率力と見る者を圧倒するカリスマ性を合わせ持っている。

このユナイテッド・サンクチュアリを代表する、または象徴するとも言える二人がスター・ゲートでデートをすることになった。

ホテルの前でアルフレッドはいつもの鎧とアンダースーツの代わりに黒のスーツを着用してアマテラスを待つ。

（初めてだな。女性とデートするのは……しかも相手は超ビツクのオラクルシンクタンク社長のアマテラス。まあ、俺もロイヤルパラディンの騎士王だけだな）

そんなことを考えている内に、

「アルフレッド〜！ 待たせたの〜！」

アマテラスは手を振りながらアルフレッドの元へ走ってくる。

服装は和服ではなく、ドレス風の黒のワンピースだった。

綺麗な長い黒髪のアマテラスに良く似合い、またいつもと違う雰囲気を出していた。

「どうじゃ？ アルフレッド！」

アマテラスはアルフレッドに服を褒めてもらいたくて、クルツと一回転する。

その際にアマテラスの黒髪とワンピースのスカートがふわっと浮き上がる。

「あ、ああ……とっても似合っていて綺麗だよ……！」

「そうかの！？ 嬉しいのじゃ！」

アマテラスはアルフレッドの腕に抱きつく。

その際にアマテラスの柔らかいモノがアルフレッドの腕に感触が伝わる。

「そ、それじゃあ、行こうか？」

「うむ！」

若干緊張しているアルフレッドとご機嫌なアマテラスはデートを開始する。

二人のデートを五つの影が追いかける。

まずその内の三つはバトルシスターのもか、ここあ、しよこらの三人である。

「アマテラス様、綺麗です……」

「アルフレッド様もなかなかだね〜」

「は、はわわ！ 見つかりませんように！」

ちなみにここあに関してはナイフではなく、カメラを構えている。

「何故……我がこんな事を……？」

もう一つの影はギャラティンである。

バトルシスターの三人に無理やり連れてこられたのである。

そして、最後の五つ目は……。

『アルフレッド……』

心配そうにアルフレッドを見つめる愛馬ライオンメイン・スタリオ

ンである。

主の初デートを心配して見に来たのだ。

そんな四人と一頭は騎士王とCEOのデートを尾行する。

アルフレッドとアマテラスは街でショッピングを楽しんでいると、美味しそうなクレープ屋を見つけた。

「アルフレッド！ あそこのクレープを食べるぞ！」

「クレープか……良いな、食べようか」

二人はクレープ屋でアイスが入ったクレープを二つ注文する。

アルフレッドは無難にバニラアイスを選び、アマテラスは抹茶アイスを選んだ。

アマテラスは抹茶アイス入りのクレープに目を輝かせ、口いっぱい頬張った。

「はむっ！ ん~~~~っ！ アイスの冷たさとクレープの温かさが

程よく合わさって最高のじゃ〜！」

ほったが落ちそうなくらいのクレープの美味しさにアマテラスはうっとりした表情を浮かべる。

「そう言えば、アマテラスは抹茶とか和菓子とかが好きだったな」

「うむ、抹茶と和菓子は私の大好物！ 今度ユナイテッド・サンクチュアリの美味しい和菓子店をアルフレッドに紹介するぞ」

「楽しみにしているよ。それとアイスが頬に付いているよ」

「何！？ どこじゃ？」

「ここだよ」

アルフレッドは指でアマテラスの頬についたアイスをすくい、そのまま舐める。

「んっ。抹茶アイス、美味しいな」

「——っ！？ ズ、ズルのじゃ！ アルフレッド、お主のクレープを一口寄越すのじゃ！」

アマテラスは顔を真っ赤にしてアルフレッドに向けて変な怒りを見る。

「どうしてそうなるんだ？ まあ、別に良いけど……はい、あーん」

アルフレッドはクレープをアマテラスの口に持って行く。

「あ、あーん……はむっ。モグモグ……うん、美味しいのじゃ！」

アマテラスは口を開いてクレープを一口食べる。

「じゃあ、俺も……パクッ」

アルフレッドも口を開けてアマテラスのクレープを一口食べる。

「ああっ！？ 何をするのじゃ、アルフレッド！」

「んー♪ 美味しいな」

「返すのじゃ！ 我の抹茶アイスを返すのじゃー！」

「はいはい。ほら、もう一口あげるから」

「むううつ……仕方ないの。あーん、はむっ！」

アマテラスはアルフレッドのクレープをもう一口食べる。

そして、アマテラスは自分のクレープをアルフレッドに向ける。

「アルフレッド、食べるのじゃ！」

「ん？ それじゃあ、いただきます」

二人はお互いのクレープを甘く食べさせ合う。

「……甘い、甘過ぎる……」「……」

デートを尾行している四人はクレープからの甘い展開に口から砂糖を吐きそうになる。

「あの……アマテラス様と騎士王様は恋人同士じゃありませんよね……？」

「それなのに……あの二人はバカップル？」

「み、見ているこっちが恥ずかしいです……」

特にもか、ここあ、しよこらは二人の甘々空間に既に撃沈している。

「あんな騎士王様の姿は始めて見た……よっぽどアマテラス様とのデートが楽しいようだな……」

『アルフレッド、幸せそう……アマテラスとお似合い』

ギャラティンはうんうんと頷き、ライオンメイン・スタリオンは安心したような表情をしてデートを見守る。

だが、そのデートを邪魔する無粋な“<sup>エンジェル</sup>天使”が現れる。

「やっと見つけましたよ、社長!!」

「御主人様、心配いたしましたよ!」

「ん?」

ちょうどクレープを食べ終わったアルフレッドとアマテラスは疑問符を浮かべながら振り向く。

それは眼鏡をかけた容姿端麗な秘書と執事で、オラクルシンクタンクの間人間だった。

「社長。今すぐに社にお戻りください。社員一同社長のお帰りをお待ちしております」

秘書の名は“セレクタリー・エンジェル”。

彼女はアマテラスの秘書のエンジェルである。

有能な秘書でアマテラスを影から支えている。

だが、たまに仕事をサボってユナイテッド・サンクチュアリの街に出掛けてしまうアマテラスを頑張って捕まえる苦労人でもあるのだ。

「御主人様、お帰りください。社に私のお手製菓子を用意しておりますので」

執事の名は“フェイスフル・エンジェル”。

オラクルシンクタンク社のアマテラスに仕える腕利きの執事である。

元は社の動向を視察するために訪れた隣国の監察官だったが、アマテラスの器量に感銘を受け離反、以後は専属執事となった。

事務・雑務・戦闘などあらゆる面において多様な才能を持っている。

アマテラスは二人の登場に嫌な表情を浮かべる。

「げっ！？ セレクター！ フェイスフル！！」

「お二方、どうしてスター・ゲートに？」

「これはこれは騎士王様。社長がご迷惑をお掛けしました」

セレクター・エンジェルはアルフレッドに向かって礼儀正しく頭を下げる。

「社長を我が社に連れ戻すために私とフェイスフルが参りました。さあ、社長。オラクルシンクタンク社に戻りますよ」

「絶対に嫌じゃー！！」

アマテラスはアルフレッドの後ろに隠れる。

「我はアルフレッドと甘々デートをしているのじゃ！ セレクター  
ー、邪魔するでない！！」

「なっ！？ 騎士王様とデート！？ ど、どうして騎士王様とそ  
ような関係になったか知りませんが……社長、我が儘を言っ  
てはいけません！」

「嫌じゃ嫌じゃ！ 絶対に帰らん！！」

アルフレッドよりかなり年上のはずのアマテラスが小さな子供のよ  
うに我が儘を言っ  
て駄々をこねる。

見るに耐えかねないアルフレッドはため息を付いて助け舟を出す。

「セレクターー殿。私達は明日にノヴァグラップラーと同盟を發表  
します。そしたらアマテラスを含めて全員ですぐにユナイテッド・  
サンクチュアリに帰りますので今日はアマテラスを見逃してくれま  
せんか？」

「おおっ！ ナイスじゃ、アルフレッド！」

明日必ずアマテラスをオラクルシンクタンクに返すアルフレッドの  
約束に話の分かる人ならここで了承してくれるだろう。

だが……。

「ふふふ……なるほど……そう言うことですね……」

フェイスフル・エンジェルは不気味な笑いを浮かべ、背中に闇のオ  
ーラを纏う。

「セレクターリー……私に良い考えがあります」

「考え？ 言ってみて」

「はい。要するに……今ここで騎士王を抹殺して御主人様を連れて  
帰ればいいのですよ」

「「……………はい???」」

アルフレッドとアマテラスは耳を疑って目をぱちくりさせる。

フェイスフル・エンジェルの考えにセレクターリー・エンジェルも不  
気味な笑みを浮かべる。

「なるほどね。フェイスフルが騎士王様を押さえている間に私が社  
長を捕まえて社に連れ戻す……良い考えだわ」

「それでは……」

フェイスフル・エンジェルは燕尾服から無数のフォークとナイフを  
取り出して指の間に挟む。

「我が愛しの御主人様をたぶらかす騎士王め、覚悟しろ!!」

フェイスフル・エンジェルはヤバい目を輝かせながらフォークとナ  
イフを鋭く投げ飛ばす。

「ちよつ、まつ、どわあああああつ!？」

アルフレッドはアマテラスを抱きかかえてナイフとフォークを回避する。

「騎士王! 貴様、アマテラス様を抱きかかえて逃げるな! 自分一人だけで私に殺される!!」

「お前の言ってる意味が分からないわ!」

「ど、どうするのじゃ、アルフレッド! このままじゃ二人に捕まってしまうぞ!」

「くつ、せめて剣があれば……」

ピンチなその時だった。

『アルフレッドオオオオオオオオツ!!!』

土煙を上げながらライオンメイン・スタリオンが駆けてくる。

「ライオンメイン!？」

『邪魔だ、エンジェル共!!』

ライオンメイン・スタリオンはセレクトアリー・エンジェルとフェイスフル・エンジェルを蹴り飛ばす。

「キャアアアアアアアアッ!？」

「ノオオオオオオオオオオッ!？」

蹴り飛ばされた二人のエンジェルは宙に打ち上げられる。

人間界にはこんなことわざがある……『人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ』と。

しかし、二人はエンジェルなので耐久力はかなり高く、そう簡単には死なない。

すぐに復活して戻ってくるだろう。

「ライオンメイン、お前どうして……」

『そんな事より、あのエンジェル達が追っかけてくる前に俺に乗ってここから離れるぞ。俺がいればどこでも逃げられるからな』

「おお、それは頼もしいの。さすがはアルフレッドの愛馬じゃ」

アマテラスはライオンメイン・スタリオンのたてがみを優しく撫で、ライオンメイン・スタリオンは気持ちよさそうな表情をしてアマテラスに頬擦りをする。

アルフレッドはライオンメイン・スタリオンの背に乗ると、アマテラスに向けて手を伸ばす。

「我が姫君。共に行きましょう」

物語の騎士が姫に送るような台詞を言うアルフレッドにアマテラス

は優しい笑みを浮かべて自らの手を伸ばす。

「我をどこへでも連れて行ってくれ、騎士様」

お互いの手を握り、アルフレッドはアマテラスを引き上げてライオンメイン・スタリオンに乗せる。

「しっかり掴まってるよ」

「うむ！」

アルフレッドが手を前に出すと、手綱がライオンメイン・スタリオンに装着される。

「はあっ！」

手綱を操り、ライオンメイン・スタリオンを走らせ、追っ手のエンジェル二人から逃げながら、アルフレッドとアマテラスはデートを再開させるのだった。

## 第15話 結ばれた想いと心（前書き）

今回でデートとスター・ゲート編の終了です。

## 第15話 結ばれた想いと心

オラクルシンクタンク社からアマテラスを連れ戻しに来たセレクター・エンジェルとフェイスフル・エンジェルの追跡から逃れながら、アルフレッドとアマテラスはデートを楽しんでいる。

ショッピング、ゲームセンター、映画……時間の許す限り二人はライオンメイン・スタリオンに乗って色々な場所を巡った。

そして、楽しい時間は早く過ぎ、時刻は既に夜となっていた。

「アルフレッド、最後にあそこに行くぞ！」

「わかった、行こう。ライオンメイン！」

アルフレッドとアマテラスはライオンメイン・スタリオンを走らせて向かったのは山の上にある展望台である。

ライオンメイン・スタリオンは名馬と言われており、山をあっという間に駆け上って僅か数分で頂上の展望台に到着した。

「到着じゃー！ おおっ……アルフレッド、見るのじゃー！」

「これは……凄く綺麗な夜景だな……」

ライオンメイン・スタリオンから降りたアマテラスとアルフレッドの目に映ったのは、展望台から見下ろしたスター・ゲートの見事な夜景だった。

鮮やかな光が夜のスター・ゲートの街を彩り、誰もがうつとりする程の美しい光景だった。

「アルフレッド、今日は感謝するのじゃ！ 最高のデートだったぞ！」

「こちらこそ楽しかったよ。おっと、忘れない内に……はい」

アルフレッドは小さな黒い箱を取り出してアマテラスに渡す。

「何じゃ？ これは？」

「開けてみて」

「うむ」

アマテラスは恐る恐る開けると、箱の中には小さな蝶々のピアスが二つ入っていた。

「これ……アルフレッドが我にか……？」

「もちろん。今は夜だからちょっと見えにくいけど、その蝶はピンクダイヤモンドを削って造られたピアスだよ。付けて見せてくれるか？」

「う、うむ……」

アマテラスは両耳にいつも付けている金のピアスを外して、蝶々のピアスを付ける。

夜景から僅かに来る光がピンクダイヤモンドで出来た蝶々のピアスに反射してキラキラと輝いている。

「ど、どうじゃ……？」

「ああ。淒く似合っているよ、アマテラス」

「うつつ……」

突然、アマテラスは俯いてしまった。

いつもなら元気よく返事をしたりするが、アルフレッドにピアスをプレゼントされてから様子が明らかにおかしかった。

「どうしたんだ？　もしかして、プレゼントが気に入らなかったのか……？」

アルフレッドは少々不安な表情を浮かべるが、アマテラスは首を左右に振る。

「ち、違うのじゃ。ただ、初めてなのじゃ」

「何がだ？」

「お、男からの贈り物は……だから、嬉しすぎて……気が狂いそうなのじゃ……」

アマテラスの純情な心に自身の顔が真っ赤になっており、今が夜で顔がアルフレッドによく見えてなかったのが幸이었다。

「の、のお……アルフレッド」

「ん？ 何だ？」

「素敵なプレゼント、ありがとうなのじゃ。だから……我も今からアルフレッドにプレゼントをあげるのじゃ。受け取ってくれるか？」

「ああ。もちろんだよ」

「で、では、一時だけ目を閉じてくれるか？ 少し準備をするから……」

「わかった」

アルフレッドは目を閉じてアマテラスの言葉を待った。

そして、数秒後。

「……よし。アルフレッド！」

アマテラスは準備が出来たらしく、大声でアルフレッドを呼んだ。

「はい、アマテラス」

アルフレッドは目を閉じたまま返事をした。

「我は……我はアルフレッドの事が大好きじゃ！ 愛しているのじや！！」

「……………え？」

アルフレッドは一瞬耳を疑い、思わず目を開けてしまった。

次の瞬間、アマテラスの顔が目の前にあり、自分の唇に柔らかいものが触れた。

言わずもがな、アマテラスはアルフレッドにキスをしたのだった。

（アマテラス……）

アルフレッドは驚いたが、キスをしたままアマテラスを優しく抱きしめた。

二人は初めてのキスに少しだけ戸惑っていたが、鼻でゆっくり息を

し、時々キスの向きを変えながらお互いの唇をゆつくりと甘く重ね続けた。

そして、二人はお互いの唇をゆつくり離れた。

「アマテラス……」

「アルフレッド……プレゼントはその……我自身じゃ」

「えっ？ それって……」

「つまり……我を嫁として貰ってくれないかの……？」

要するに遠まわしに結婚してくれとプロポーズをしている。

「アマテラスが俺の嫁か……」

「い、嫌ならいいのじゃ！ 我はノーブルでお主の何百倍も長生きしておる年増じゃし、やっぱり同じヒューマン同士で——」

「俺と結婚してくれ、アマテラス」

アマテラスの言葉を遮り、アルフレッドはプロポーズする。

「へ……？」

「ノーブルとかヒューマンとか、そんなのは関係ない。俺もアマテラスを愛している。だから、俺の妻になってくれ」

真剣な眼差しで見つめてくるアルフレッドにアマテラスは目に涙を

浮かべる。

「アルフレッド……はい！」

アマテラスはOKの返事を出してアルフレッドに抱きついた。

「愛しておるぞ、アルフレッド……」

「俺もだよ。愛している、アマテラス……」

二人はもう離さないと言わんばかりに互いを強く抱きしめた。

（愛する女と一緒になれたか。良かったな、アルフレッド……これはロイヤルパラディンで盛大に祝わなくちゃな）

二人を見守っていたライオンメイン・スタリオンは空を見上げた。

（我らロイヤルパラディンの神、ソウルセイバー・ドラゴン様。どうか……我が主、アルフレッドとその妻アマテラスにあなた様の祝福をお願い致します……）

ライオンメイン・スタリオンは二人の未来の為に聖域の守護竜にして騎士達の神“ソウルセイバー・ドラゴン”に祈りを捧げた。

翌朝、アシュラ・カイザーとの約束の日となり、アイチ達はスタジアムに向かった。

しかし、肝心のアルフレッドがまだ来ておらず、アマテラスも含めて昨日の夜ホテルに帰っていなかった。

スタジアムの外でブラスター・ブレードはアルフレッドを待っていた。

「全く、同盟の発表にロイヤルパラディンの代表が居ないなんて……」

ブラスター・ブレードは呆れていると、向こうから土煙が上がってこちらに向かってくる。

「やっと来たか……」

ブラスター・ブレードが呟くと、ライオンメイン・スタリオンに乗ったアルフレッドとアマテラスがやって来た。

「すまない、遅くなった！」

「全く。遅刻だぞ、アルフレッド」

「ああ。行こう、ブラスター・ブレード」

「了解」

「アルフレッド〜!」

アマテラスが笑顔で手を振ると、アルフレッドは軽く手を振ってブラスター・ブレードと共にスタジアムに行く。

アルフレッドを見送ったアマテラスはライオンメイン・スタリオンから降りる。

「行こうかの、ライオンメイン」

ライオンメイン・スタリオンは軽く頷き、ロゼンジ・メイガス達の元へ向かった。

アルフレッドとブラスター・ブレードがスタジアムに入ると、フィールドにアシュラ・カイザーを中心にノヴァグラップラーの戦士達が集結していた。

アシュラ・カイザーは前に出てアルフレッドに話しかける。

「騎士王よ。戦士達に同盟の話をしたが、やはり賛否両論だった」

「わかっています。そればかりは仕方ないことです」

「だが、俺様はこの同盟は未来の為に必要な事だと思い始めた」

アシュラ・カイザーは手を差し出す。

「はい。共に未来の為に全力を尽くしましょう」

アルフレッドはアシュラ・カイザーの手を取り、握手を交わす。

ユナイテッド・サンクチュアリの聖騎士団ロイヤルパラディンとスター・ゲートの格闘技集団ノヴァグラップレーが同盟を組んだ瞬間だった。

無事に目的を達成したアイチ達は一旦ユナイテッド・サンクチュアリへ帰ることにする。

特にアマテラスに関しては一度オラクルシンクタンク社に戻らないと、今度こそセレクトリー・エンジェルの逆鱗に触れて、何が起きるかわからないので……。

ノヴァグラップレーのヴァンガードのカムイも一緒に行くことになっているので、護衛にゴールド・ルチルが付くことになった。

一同はペンドラゴンに乗り、ユナイテッド・サンクチュアリへと帰るのだった。

## 第15話 結ばれた想いと心（後書き）

次回からはかげろふ編になります。

やっとうぐ君の出る新章突入です。



## 第16話 聖域の守護竜

スター・ゲートからユナイツッド・サンクチュアリに戻ったアイチ達。

アルフレッドとアマテラスはロイヤルパラディンとオラクルシンクタンクにそれぞれ戻った。

アマテラスは未来の夫のアルフレッドと一時の別れを惜しんだが、アルフレッドの説得により渋々オラクルシンクタンク社へ戻った。

アルフレッドも数日間空けていたロイヤルパラディンで仕事に専念する。

ブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスは引き続きアイチとミサキの護衛を担当し、ギャラティンやバトルシスター達はそれぞれの仕事場に戻った。

そして、ユナイツッド・サンクチュアリに始めて来たカムイは目を輝かせていた。

「すっげー！　ここがユナイツッド・サンクチュアリか！」

「流石は聖域連合と呼ばれるだけあって素晴らしいところだ」

護衛のゴールド・ルチルも感心していた。

「ゴールド・ルチル。良ければ今度他のロイヤルパラディンの騎士達と模擬戦をしてみないか？」

「本当か？ ブラスター・ブレードよ」

「ああ。きつとみんなも喜んで相手をするよ」

「楽しみだな。聖騎士達との模擬戦は」

ノヴァグラッブルバトルを経て、ヒューマンとバトロイドの壁を越えてすっかり打ち解け合ったブラスター・ブレードとゴールド・ルチルだった。

すると、ロイヤルパラディンの拠点の城から一匹のハイビーストが出て来た。

そのハイビーストは犬型で、深い青色のサイボーグだった。

「君は……ぼーんがる？」

アイチがその名前を呼ぶと、犬型ハイビーストはアイチの前でお座りをした。

その犬型ハイビーストの正体はロイヤルパラディンのハイビースト部隊の内の一体“ぼーんがる”である。

「どうしたの？」

アイチは腰を下ろしてぼーんがるの体を両手で撫でる。

「クウン……」

ぼーんがるは気持ちよさそうな顔をしてアイチに頬擦りをする。

「ははっ、くすぐりたいよ」

アイチは微笑むと、城から一人の少女が走ってくる。

「見つけたわよ、ぼーんがる!!」

それは、露出度の高い服に見事な赤い髪をサイドポニーに纏めた可愛らしい少女だった。

その少女はロイヤルパレードのハイビーストの世話係であるハイドッグブリーダーの一人“ハイドッグブリーダー アカネ”である。  
アカネはぼーんがるの周りに、アイチとブラスター・ブレードの存在に驚いて慌てた。

「先導アイチにブラスター・ブレード!?　ぼーんがる、あなた何かしたの!？」

「違いますよ。ただ、ぼーんがるが突然僕の前にやって来ただけですから」

「そうですか……全く、急にどこかに行っちゃうんだから……」

アカネは腰を下ろし、目を閉じてぼーんがると心を通わせる。

「……そう。先導アイチをあの場合に連れて行きたいのね」

心を通わせたアカネはぼーんがるの気持ちを受け取った。

「良いわ、ぼーんがる。一緒に行ってあげて」

アカネはぼーんがるを一撫ですると、アイチに視線を向ける。

「先導アイチ。ぼーんがると一緒に“守護竜神殿”に行ってくれない？」

「守護竜、神殿……？」

「ぼーんがるはあなたをそこに一緒に行って欲しいの」

「えっと、わかりました。取りあえず行ってみます」

「ぼーんがるの事、よろしくね」

「は、はい」

アカネはぼーんがるをアイチに託すと、その場を後にして仕事に戻った。

アイチはブラスター・ブレードに守護竜神殿の事を聞く。

「ブラスター・ブレード。守護竜神殿って、何？」

「守護竜神殿……それは、このユナイテッド・サンクチュアリで一番古く、国宝に認定されている建造物の事だ。案内するよ」

ブラスター・ブレードの案内で城から少し離れた丘に石で出来た巨大な建造物がそびえ立つ。

アイチ達は神聖な空気が漂う神殿に足を踏み入れた。

中に入った瞬間、アイチは目を見開いて呟く。

「ソウルセイバー・ドラゴン……」

神殿内の中央にユナイテッド・サンクチュアリを守護する聖なる竜“ソウルセイバー・ドラゴン”の見事な石像が置かれていた。

そして、奥には巨大な壁画が描かれていた。

古のロイヤルパラディンの騎士達が闇の勢力と戦いを繰り広げている壁画だった。

そして、太陽のように眩く温かい光で騎士達の傷を癒しているソウルセイバー・ドラゴンの姿も描かれていた。

「守護竜……そうか、ここはソウルセイバー・ドラゴンを奉る神殿だったんだ……」

アイチが納得したように呟くと、ミサキは何かを見つける。

「壁画に文章が刻まれている……何て書いてあるの？」

それは不思議な形をした見たことのない文字だった。

「ミサキ様、私が読んで差し上げましょうか？」

ロゼンジ・メイガスが名乗りを上げた。

「ロゼンジ、この文字を読めるの？」

「はい。これは古に使われた文字です。幼い頃に習いましたから読めます」

「それじゃあ、お願い」

ロゼンジ・メイガスは頷いて古の文章を読み上げる。

「はい。この壁画の文章にはこう書かれています。“悪しき力により天空が覆われる時、暗雲を切り裂く一条の光が聖域に舞い降りる”。これは、ユナイテッド・サンクチュアリに古くから伝わるソウルセイバー・ドラゴン様が降臨なされる時の伝承です」

読み上げると、プラスター・ブレードは懐かしそうに見る。

「そう言えば、この伝承通りに一度ソウルセイバー・ドラゴンが降臨なされたな……」

「え？ そうなの？」

アイチが思わず尋ねてしまった。

「結構昔の戦いでな。ソウルセイバー・ドラゴンの聖なる光“ホーリー・チャージング・ロアー”は本当に温かくて心地よい光だった。傷を癒し、挫けそうになった俺達の心の勇気を奮い立たせてくれた。まさしく俺達ロイヤルパラディンにとっては女神だったよ」

ブラスター・ブレードの話を聞き、アイチは羨ましくなった。

「会ってみたいな……ソウルセイバー・ドラゴンに」

アイチが心の底から願ったその時。

「ウォオオオーン！」

ぽーんがるが天に向かって突き通るように綺麗な声音で雄叫びを上げた。

「ぽーんがる……？」

すると、突然アイチの目の前が真っ白になった。

「——っ!？」

アイチは意識がグラツと揺らぎ、どこかに飛ばされそうな感覚になる。

（何、これ……）

気が付くとアイチは周囲が雲に覆われ、上を向くと青空が広がる世

界に居た。

（空の上……天空？）

アイチは呆然と天空を見渡す。

『先導アイチ……』

（えっ！？）

声をかけられて、アイチが振り向いた先にいたのは、

（ソウルセイバー・ドラゴン……？）

そこに居たのは、アイチがつい先ほど会いたがっていたソウルセイバー・ドラゴンだった。

惑星クレイに存在する全てのドラゴンの中で一番美しく、女性のように丰满な胸囲とくびれた腰……正しくユナイテッド・サンクチュアリを守護する女神竜と呼ぶに相応しい本当に美しいドラゴンである。

『先導アイチ。このユナイテッド・サンクチュア리를……いいえ。この惑星クレイを護る為に共に戦ってくださいか？』

（は、はい！ 僕一人じゃ力不足かもしれないけど、大切な仲間達と一緒に戦います！）

アイチの勇気ある答えにソウルセイバー・ドラゴンは微笑む。

『ありがとう、先導アイチ。もし、あなたが望むならば私も戦地に参り、共に戦いましょう』

（ありがとうございます、ソウルセイバー・ドラゴン！）

『しかし、私を呼び出すには私の力の一部を秘めた獣の存在が必要です。それを忘れずに』

ソウルセイバー・ドラゴンは体から聖なる光を発し、アイチを包み込んだ。

「アイチ！ アイチ！！」

（ミサキさん……？）

アイチは意識を覚まして目を開けると、ミサキの顔が目の前にあった。

「ミサキさん……僕、どうしたんですか……？」

「覚えてない？ 急にアイチが気を失って倒れて……」

今、アイチとミサキが居るのは守護竜神殿の外にある草原だった。

少し離れた場所にブラスター・ブレードとロゼンジ・メイガスがくっついて座って話しており、カムイとゴールド・ルチルは寝っ転がって昼寝をしている。

「そうだったんですか……あれ？　もしかして、ミサキさん……」

アイチの後頭部に感じたことのある柔らかい感触がある。

「膝枕だよ。もう少し休んでて良いからね」

ミサキは優しい笑みを浮かべてアイチの頭を撫でる。

「は、はい……」

アイチは目線を反らしてもう少し心地いい膝枕の感触を楽しむ。

目線を反らした先にぽーんがるが自分の隣に伏せて眠っており、アイチは手を伸ばして頭を撫でた。

（ぽーんがる。君がソウルセイバー・ドラゴンと会わせてくれたんだね。ありがとう……）

アイチ達はそこでゆっくりとまったりとした時間を過ごした。

そして、数日後にチームQ4最後の一人、櫛トシキに会うために“ドラゴン・エンパイア”に向かうのだった。

.

第16話 聖域の守護竜（後書き）

次回、やっと櫛トシキの登場です！

いやー、長かった……。

## 第17話 帝国の暴竜（前書き）

タイトル通り、かげろふの指揮官登場です。

そして皆さんが待ちに待ったあの人も登場します。

## 第17話 帝国の暴竜

アイチとソウルセイバー・ドラゴンの出会いから数日後。

アイチ達はチームQ4最後の一人にしてかけろうのヴァンガード、  
權トシキに会うためにドラゴン・エンパイヤに向かう。

しかし、問題があった。

ロイヤルパラディンとかげろうは、古から幾つもの戦争を繰り返して戦い続けた宿敵同士。

よって、今回のドラゴン・エンパイヤに向かうロイヤルパラディンの聖騎士をかけるうに刺激を与えないように極力少なくする必要がある。

そこで、今回のアイチの護衛はブラスター・ブレード一人となる。

オラクルシンクタンクからは、ドラゴン・エンパイヤと対等に交渉が出来るアマテラス（今度はちゃんと許可等を取ってある）、ロゼンジ・メイガス、ツクヨミが付き添う。

そして、カムイとゴールド・ルチルも共に行く。

出発する前日、アルフレッドはブラスター・ブレードに不思議な腕輪を渡す。

「何だこれは？」

「技術開発部に造らせた科学魔法具だ。その腕輪に武器と鎧とアンダースーツを収容する事が出来る。必要な時に着ている服と瞬時に交換して戦闘態勢を取ることが出来るわけだ」

「へえー……なかなか便利な腕輪だな」

「ドラゴン・エンパイヤに行く時に鎧を着ていたら、かげろふの戦士にすぐにロイヤルパラディンの騎士とバレてしまうからな」

「わかった。適当な私服を着て行くよ」

ブラスター・ブレードは腕輪を左手首に付ける。

「何かあったらまたアイチの指輪の転移魔法から俺が再び参上するからな」

「出来ればお前が参上せずに事を速やかに終わらせたいな……」

「うーん。そこは俺の嫁さんの交渉次第だな……」

俺の嫁と言い、ブラスター・ブレードは首を傾げたがすぐに納得した。

「ああ……アマテラス殿の事が……そんなにラブラブだったら早くみんなに報告したらどうだ？」

きつとロイヤルパラディンだけでなく、ユナイテッド・サンクチュアリ中が驚愕すること間違いなしである。

「ま、追々な」

アルフレッドはもう少し秘密にしていたいようだった。

「それじゃあ、俺は愛しのアマテラスの所に行くからお前は早く休めよ」

「お前こそ、アマテラス殿と程ほどにな。アマテラス殿が腰を痛めて出発が翌日に延期するなんて御免だからな」

「……………ああ、そうだな」

数秒遅れてアルフレッドはコクンと頷く。

「おい………… お前、どれだけアマテラス殿とヤルつもりだったんだよ………… この変態騎士王め。少しは自重しろ」

ブラスター・ブレードはギロリとアルフレッドを睨み付け、新たな騎士王の称号を与えた。

「……………さらばだ」

アルフレッドはブラスター・ブレードから逃げるように立ち去ってアマテラスの元へ直行した。

翌朝、アイチ達はペンドラゴンに乗り込んでドラゴン・エンパイヤに向かう。

メンバーの中でアマテラスが一番元気そうに見えたのは気のせいではなかった。

惑星クレイ最大級の大陵、ドラゴン・エンパイヤに降り、かげろうの戦士たちが住まう街にたどり着く。

そこは巨大な城壁に囲まれた場所で門から通らないとならない。

「止まれ、貴様等何者だ！」

さっそく門番に足止めを食らい、アマテラスが前に出る。

「我はオラクルシンクタンク社長のアマテラスじゃ。この門を通してもらうぞ」

「オラクルシンクタンク！？ 貴様等、ユナイテッド・サンクチュアリの人間か！？」

「如何にも。早く通すのじゃ」

「そうはいかない！ 貴様等をここで捕まえてやる。衛兵、衛兵！」

門番は衛兵を呼んでアイチ達を囲んだ。

「いきなりピンチだね……」

ミサキは額に手を当ててため息を付く。

「ブラスター・ブレード、いける？」

「アイチと私でなら何とかなる」

アイチとブラスター・ブレードは小声で門番と衛兵を倒す作戦を練る。

しかし、アマテラスとツクヨミが二人を制するように前に出る。

「ここは我らに任せるのじゃ。ツクヨミ、準備は良いか？」

「うん、一拍子！」

ツクヨミは一拍子を呼んで背中に乗って、一つになって満月の女神に変身する。

アマテラスは両手に丸い鏡を出現させて大事そうに持つ。

「八咫鏡」

「月影の勾玉」

二人が呟くと、二人の持つ神器が聖なる光を放つ。

「とっ、捕らえろ！」

門番の一人が言つて一斉に襲いかかるが、既に遅かった。

「「神気解放波」」

八咫鏡と月影の勾玉から波動の衝撃波が発生して門番と衛兵達を全て吹き飛ばした。

今、アマテラスとツクヨミがやったのは“神気”と呼ばれるノーブルだけが持つ魔力とは別の“神の力”を衝撃波として放ったのだ。

結果、不思議な力を目の当たりにした門番と衛兵達は恐れて動けなくなつた。

「まあ、こんなもんじゃろ。みんな、早くかげろふの指揮官殿に会いに行くぞー」

そう言うのと、アマテラスはアイチ達を引き連れて堂々と門の中に入つていった。

赤と黒の不気味な雰囲気彩る城下町を抜け、石で作られた古城に向かう。

当然、門番は衛兵が居たので、アマテラスとツクヨミの神気解放波でまた吹き飛ばして古城に乗り込む。

「アマテラスさんって、結構大胆だね……」

「流石はアルフレッドの嫁と言ったところか……」

アイチとブラスター・ブレードはアマテラスの大胆さに呆然としな

がら付いていく。

そして、アイチ達は古城の中心らしい大広間にたどり着くと、そこには巨大な影があった。

「ふん……来たな、ユナイテッド・サンクチュアリの侵入者め」

その巨体はアイチ達が知る者だった。

「ドラゴニック・オーバーロード……」

巨大にして凶悪な姿をした真紅の竜“ドラゴニック・オーバーロード”。

軍事国家の航空攻撃部隊・かげろつの指揮官。

神速の機動力で戦果を挙げ、戦場では「真紅の死神」「黙示録の風」と呼ばれるほど恐れられている。

「久しいの。指揮官殿」

「ふん……来たな、ババアが」

「誰がババアじゃ!？」

「我より倍以上も年上だからババアがお似合いだ」

「貴様……八咫鏡で焼き尽くして灰にしてやるつか？」

「やれるものならやってみろ、ババア」

会って早々アマテラスとドラゴニック・オーバーロードは一触即発状態。

取りあえず、そんな状態を打破するためにアイチが前に出た。

「あ、あの！ ドラゴニック・オーバーロードさん！」

「誰だ、貴様は？」

「僕はロイヤルパラディンのヴァンガード、先導アイチです！」

「ロイヤル、パラディンだと……？」

ドラゴニック・オーバーロードは眉をピクツと動かす。

「突然の訪問、申し訳ありません。今日は話があつてここに来ました！」

「ほう……話か。言ってみよ」

「はい！」

アイチはドラゴニック・オーバーロードに同盟の話をする。

だがしかし。

「断る」

ドラゴニック・オーバーロードは同盟の話を即答で断った。

「それは……ロイヤルパラディンが嫌いだからですか？」

「ふん。小僧、わかっているな。我らは太古の昔よりロイヤルパラディンと争っていた。今更仲良く同盟なんか片腹痛いわ」

「……それで良いんですか？」

「何だと？」

「それでかげろうが滅んでも良いんですか？」

「小僧、何を言っている？」

ドラゴニック・オーバーロードは鋭い眼光でアイチを睨みつける。

「確かにロイヤルパラディンとかげろうは昔から争っていたのかも  
しれません。でも、いつまでも争っていたらダメなんです。正体不  
明の未知の敵と一緒に立ち向かわなきゃ未来は無いと思います」

「黙れ……」

ドラゴニック・オーバーロードは機嫌を悪くし、腰に携えた剣を引き抜く。

「貴様のような小僧が分かったような口を利くな！！」

ドラゴニック・オーバーロードはアイチを威圧して剣を振り下ろした。

アイチは威圧されて全く動けずにその場に立ったままだった。

「アイチ……！」

ミサキが大声で叫ぶ。

「くっ！ 来い、ブラスターブレード……！」

「ゴールド・ルチル、お兄さんを！」

「分かっている！ ガルダブレード……！」

ブラスター・ブレードは腕輪からブラスターブレードを取り出し、カムイの命を受けてゴールド・ルチルはガルダブレードを鞘から抜く。

急いでアイチの元へ走るが、間に合うかどうか五分五分だった。

「エターナル・フレイム……！」

その時、真紅の炎がドラゴニック・オーバーロードを襲い、ぶっ飛ばしてアイチへの攻撃を中断させた。

全員が振り向いた先にはもう一人のドラゴニック・オーバーロードが居た。

「まさか……」

「危なかったな、アイチ」

もう一人のドラゴニック・オーバーロードから懐かしい声が響くと、一瞬だけ光り、その真の姿が現れる。

「俺が来たからには、これ以上仲間には手は出させないぜ」

「權君!!」

チームQ4最後の一人にしてかげろふのヴァンガード、權トシキ。

不敵な笑みを浮かべての登場だった。

更に……。

「おい待てよ、權!!」

櫛の昔からの友人“三和タイシ”が慌てて走ってくる。

「三和さん！」

「おつ、結構集まってるな。行こうぜ、櫛」

「ああ」

櫛と三和はアイチ達の元に行く。

ミサキとカムイはアイチの元に行つて、櫛と三和を迎える。

「櫛だけじゃなく三和も惑星クレイに来ていたんだね」

「まったく、カッコイイ登場をしゃがつて」

「騒ぎを聞きつけてな。急いできて正確だった」

「それにしても……おい、バーローのつつあん！！」

三和はドラゴニック・オーバーロードを「バーローのつつあん」と呼び、ドラゴニック・オーバーロードは瞬時に立ち上がる。

「誰がバーローのつつあんだ！？」

「そんな事より、オーバーロード！ 貴様、アイチを殺す気か！？」

櫛は怒りを露わにするとドラゴニック・オーバーロードは何の悪びれもなく剣をアイチに向ける。

「ロイヤルパラディンの身内を葬って何が悪い？　そこにいるブラスター・ブレードも共に焼き尽くしてやるわ！」

ブラスター・ブレードの存在を気付かれ、すぐに腕輪から鎧とアンダースーツを呼び出して装着する。

櫛は再びドラゴニック・オーバーロードに変身してアイチを守ろうとする。

「あんた達、ちょっと下がっていなさい……」

ゾクッ！？

突然、ブラスター・ブレードと櫛は背筋に寒気が走り、ゆっくり後ろを振り向いた。

「ミ、ミサキ殿……？」

「戸倉……？」

そこにいたのは殺気を体中に纏ったミサキだった。

眼光を恐ろしく光らせ、長い銀髪をゆらゆらとなびかせている。

「私のアイチを殺そうとしたあのクズを許さない……私が潰す」

「ミ、ミサキさん、落ち着いてください！」

「アイチ、少し待っていてね。すぐに片づけるから」

もはやアイチの言葉さえミサキには届かなかった。

ブラスター・ブレードと櫛は邪魔したら危ないと判断し、大人しく下がる。

「おいおい、カムイよ。ミサキちゃんどうしたんだよ？ 私のアイチって……」

「お兄さんとミサキさんはつい先日恋人同士になったんだよ……」

「マジで!?!」

「それでか、戸倉がマジ切れしたのは……」

そして、ミサキは前に出てドラゴニック・オーバーロードをギロリと睨みつける。

「あんたを潰してやるよ。ドラゴニック・オーバーロード……」

「小娘が……容赦はせぬぞ!」

オラクルシンクタンクのヴァンガード・戸倉ミサキとかけろつの指揮官・ドラゴニック・オーバーロードの戦いが始まるのだった。

## 第17話 帝国の暴竜（後書き）

次回、まさかのミサキVSドラゴニック・オーバーロード!?

恋する乙女は国土無双と誰かが言っていましたな（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5913y/>

---

カードファイト！！ ヴァンガード ～次元と未来を繋ぐ永久の絆～

2011年12月13日11時51分発行